



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヴィクトリア朝中期におけるノンコンフォーミズムと急進主義（1）
Author(s)	小川, 晃一; OGAWA, Koichi
Citation	北大法学論集, 46(5), 1-78
Issue Date	1996-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15633
Type	departmental bulletin paper
File Information	46(5)_p1-78.pdf



ヴィクトリア朝中期における

ノンコンフォーミズムと急進主義(一)

小川晃一

目次

- 一、急進主義
- 二、ノンコンフォーミズム(以上本号)
- 三、ノンコンフォーミストの政治運動
- 四、デイル
- 五、ウイックとノンコンフォーミスト
- 六、都市内政治

一八四八―九年ヨーロッパ大陸を襲った革命と反革命の動乱もイギリスではさざ波を立てたにすぎない。三〇年代末から続き、沈静化していた労働者のチャーチズム運動は、大陸の革命運動に刺戟されはしたものの、四八年が△死に体▽の年となった。四〇年代はまたマンチェスターを起点にコブデンやブライトの反穀物法同盟が活発に動き、穀物法の撤廃へとこぎつけた反穀物法同盟の運動の時代であった。しかし皮肉なことに、穀物法廃止の問題が五〇年代初め決着がつくや、運動の立役者であったコブデンやブライトは急速に力を失ってしまう。コブデン自身五二年ブライトに言っている。

……我々いわゆるマンチェスター党は議会の中で苦しい運命にあります。旧トーリーに憎まれ、ウィックに恐れられ、ピール派に疑われ、現在の政党からも見放されておりますし、我々だけでやってゆこうと努力すれば、——それは愚かなことですが——生ぬるい民主主義者、フィズベリ派の非科学的な急進派、その外の者の羨望、憎しみ、悪意の的となってしまうでしょう。一二五名でいどの熱心な自由貿易論者と財政改革主義者を除いてです。⁽¹⁾

五〇年代はまさに急進主義の衰退の時期であった。それはイギリスの繁栄と「均衡」の時代の裏返しでもある。五一年の大英博覧会の賑わいはそれを象徴する。フランスではルイ・ナポレオンがクーデタを起した年であるのとは対照的である。労働運動をみても、ヴィクトリア朝中期でその停滞は過去三〇年間英国労働史学、とりわけ左翼史学の定説となった。六四年以来『新左翼評論』の編集陣は、この時期での階級政治の「深い中止」⁽²⁾を宣言し、ホップスバウム教授は、「一八一五―一八四八年の大きな政治的動揺」と、「一八八〇年代における社会主義の再発見といわゆる△新▽労働組合主義を伴う…現代的労働運動と労働党の持続的発展」とが、「その間にはさまる時期と鋭い対照をなしている、として

いる。⁽³⁾この見解には問題にすべき点があるとはいへ、⁽⁴⁾一ときの急進主義の停滞は否定すべくもない。

世紀中葉イギリスの急進主義は消滅したわけではない。チャーチズムは無力化したとはいえずに絶えたわけではなく、E・ジョーンズがその旗を掲げ、マルクスに影響をうけつつ、社会的急進主義を唱えていた。ロウバック(ドン・パシフィコ事件のように)のように、戦闘的ナシヨナリストの急進派の者もいた。またコブデン、ブライト達マンチェスター派の急進主義もある。F・D・モリスやJ・M・ラドロウやC・キングスリーののようなキリスト教社会主義者もいた。だが、多様な急進主義は互に協力したわけではなく、それどころかしばしば反発しあいさえた。一体性の欠除や対立は急進派の特徴であり、弱点であった(このことは世紀中変らない)⁽⁵⁾。穀物法廃止以後は、コブデンとブライトの力点も同じではない。前者は財政改革——縮減と減税⁽⁶⁾——に力点を置いたのに対し、ブライトは——軍縮については同じであったが——議会改革を最大の目標にしており、他の一切の改革がこれによって可能になると考えていた。コブデンは議会改革に関心がないわけではなく——四八年J・ヒュームが提出した議会改革の動議は支持し続けたものの——⁽⁷⁾一時に二つの事に活動を集中しえない性格であった。二人の仲がいつ時冷えていったことがある。⁽⁸⁾急進主義はこうして世紀半ばすぎ弱体化していった。ジョーンズは六〇年チャーチスト雑誌の廃刊に追いこまれる。ロウバックはやがて保守化してゆく。コブデンやブライトもクリミア戦争以来孤立化してしまふ。

全体として弱体化した急進派の中ではコブデンとブライトは——ヒュームは五年に死去——最も際立つ存在となつた。⁽⁹⁾六〇年代半ばすぎ急進主義が再び活発になってゆくに従い——コブデンはその回復をあまり見ずに六五年死去した——、ブライトが急進派の大立物になってゆく。急進派の消長はこうしてとりわけブライトの運命に具現されることとなつた。四〇年代穀物法廃止同盟の成功にはブライトよりもコブデンの方が大きな役割を果たしたといえるが、「同盟の仕事」を四六年以後もうけ継いでゆくといい点ではブライトの果たした役割はコブデンのそれよりはずっと大きか

つた。：穀物法廃止後は、新しい戦線で地主と僧侶に対する戦いを続行するのがブライトの役割であった。」⁽¹⁰⁾ トロロップはブライトについてこういふ。⁽¹¹⁾

彼が立ち上がって彼の言葉を整理する技術をつかり習得して議会の人々の耳をとらえるよう発声法をマスターしてしまった時、彼の生涯の仕事はらくになったと思う。築き上げるべきものを何も持たない彼は、詳細に検討したり、あるいは重要な事実を熟知したりする必要に迫られなかった。

この見方は鋭どいが、いささか厳しすぎよう。ここではさし当り彼の運命を辿りながら、イギリス急進主義の流れを追うこととする。

ブライト（一八一—一八九）はロッチデイルの綿織物工場主の長男として生れ、クエーカーの一家としてその宗派の学校に送られた。大学にはゆかなかつた。彼自身クエーカーとしてデイセンターに共感をもち、ロッチデイルで教会税納入反対⁽¹²⁾の運動に加わつた。四〇年までには運動のリーダーシップをとるようになり、町での納入廃止に成功した。ほどなくコブデンの穀物法同盟に加わり、四二年にはダーラムから庶民院に選出された。こうしてコブデンと協力し穀物法廃止にこぎつける。

だが、コブデンやブライト、あるいはマンチェスター派は別に権力の頂点に立つたわけではない。廃止に彼らが果たした大きな役割は否定すべくもない。しかし廃止に決定的な役割を果たしたのはピール⁽¹³⁾（派）、それにウィッグであった。イギリス政治の中心は議会であり、議会が動かなければ重要な決定はなしえず、議会を動かしているのはアリストクラシーであつたのだ。彼らの一部の支持をうけたとはいへ、反穀物法同盟の勢力の根は議会外、世論と選挙区にあつた。議会は活動の場というよりは「うち負かすべき敵」とコブデンはみていた。同盟の地盤は大産業都市とその周辺都市であり、

同盟はここを根域にした圧力団体であったといえる。実際アリストクラシーに対する二人の不信感は根強くかつ一貫していた。穀物法廃止の直前(四五年一二月) プライトは、戦いは少数者に対する多数派の戦いであり、「中産・勤労階級の人数、財産、楽しみ、事実総べてのもの、この帝国のアリストクラシーの大部分の富、まともり、貪欲との間の戦い」であるといっている。⁽¹⁴⁾ グラム選出議員であった彼は、四七年の総選挙でより威信のあるマンチェスターの議席に移ろうとしたが、その自由党候補に選ばれるのに苦心した。これはかつてコブデンも味わったところである。彼は四一年総選挙の時——既にマンチェスターを拠点とする反穀物同盟の運動が活発になっていた時であるにも拘らず——マンチェスターで出候補しえなかった⁽¹⁵⁾ (結局近辺のストックポートからである)。一年前にサフォークの地主で以前保守党員であったミルナー・ギブソンが代りに選ばれたのである。市には穀物法廃止に積極的でありながら、社会的に、まだ政治的に保守的な有力層がいたのだ。プライトの場合にも町の有力者(ポッター達)が社会的地位の高い者(リンカン卿)に傾いていたのである。プライトは彼らが「自分達と同じ地位の者よりはトリー(「ビール派」)の方を好むあわれな卑劣漢であり、彼らが不満なのは「工場主一家の私に」⁽¹⁶⁾ 社会的地位がないということだ」と、マンチェスターの有力者を批判した。五二年ウィッグ内閣が倒れそうになっている時も彼は「ウィッグが舞台からいなくなるのが早ければ早いほどよい」といっている。⁽¹⁷⁾

同盟は貴族政治の不正を敵とする。国教会は貴族政治の産物であり、道具である。⁽¹⁸⁾ (プライト)

クリミア戦争の時コブデンもプライトも反戦の立場に立った。このため国中が愛国熱に浮かされている中で孤立してしまう。そもそもコブデンは——経済的レッセフェールのみでなく——最少限(主に海軍)の軍備は必要とみるものの、伝統的な外交・同盟方式を拒否する大陸不介入主義者であり、⁽¹⁹⁾ プライトも伝統的な勢力均衡政策が有害な偽膳⁽²⁰⁾ であって、過去の遺物であるとし、限りなく大陸への不介入主義に近い立場であった。⁽²⁰⁾ 五七年中国(アロウ号事件)政策批

判でコブデンは動議を提出し、パーマーストンを議会の解散にまで追い込んだ。にも拘らず総選挙でパーマーストンは却って愛国主義的感情に訴え、劇的勝利を収める。この時マンチェスターで急進派のブライト、M・ギブソンとも落選してしまふ。⁽²¹⁾北部、特にマンチェスターで急進派の退潮は著るしい。コブデンもこの選挙で敗れた。マンチェスター派の崩壊である。

ブライトの代表ははじめから問題があつた。繁榮するマンチェスター人は今や自分で議席をうめようと欲した。ニューオール・ビルにある古き同盟の残存する選挙議席は反感と敵意をよび起した。△マンチェスター派▽の社会的、政治的、商業的まともりはマンチェスター自体の中で崩壊した。社会的渴望と経済的自己利益(陽気でアナクロニスティックなパーマーストンがレヴァントや極東でマンチェスターの綿産業の利益をみてくれるという信条)と政治的現状での満足は、マンチェスターと△中産階級精神▽とがいち早くイギリスの支配的エストとなろうというブライトの希望を打碎いた。⁽²²⁾

コブデンもブライトも五〇年代「孤立と挫折」⁽²³⁾の中にあつた。コブデンは対仏関税交渉に当り、積年の念いを実現したが、ブライトには——あまりにもあからさまなイスタブリッシュメント批判のため⁽²⁴⁾——そうした機会も与えられなかつた。

マンチェスターで落選したブライトはほどなくパーミンガムから招かれここで議席をえる。パーミンガムこそは世紀後半、マンチェスターに代り、イギリス急進主義の中樞になってゆく所である。組合教会派の牧師デイル(後述)が道義心溢れる彼の演説をきき、畏敬の念を覚えさせられるのもこの時である。⁽²⁵⁾やがて急進派の中心的人物の一人となってゆく若き二二歳のチェンバレンも同じくこの演説を聞いた。彼はのちこういつてゐる。⁽²⁶⁾

私はブライト氏とコブデン氏の学派の中で育つた。この民衆の偉大なるリーダー達は……その政治的生涯を通したただ一つの目的を追求した。それは人民大衆の社会的条件的条件をひき上げることであり、直接この結果を生みうるようなものでなければ、彼らは憲法上の変革に抵抗

したのである。

アメリカの南北戦争の時ブライトは一貫して北部側を支持した。これは政界での孤立を意味した。政府は公式には中立の立場であったが、政界は南部寄りであった。世論も主流は南部寄りであった。労働階級—組合系の新聞『蜂の巣』^{（27）}などでさえそうであった。北部側支持は労働者の集会で表明されるぐらいのものであった。ブライトが訴ええたのは、この労働者の集会であり、ランカシャーでは彼は南部からの原綿輸入の途絶によって深刻な打撃をうけていた労働者に高邁な大義をさえ訴ええた。北部支持の少ない政治家の中でこうして彼はイギリスでの北部支持の態度と一体化され、まさにその象徴となった。「ブライトの名前はリンカンの名前と至る所で結びつけられた。」あるアリストクラットは「もし思いがかなうなら、リンカン大統領に臼砲を一発見舞ってやる。それで足りなければ次はジョン・ブライトを張り倒してやる」といった^{（28）}という。当時の労働者運動を研究しているR・ハリソンによれば、南北戦争がイギリス労働運動に与えた影響は計り知れないほど大きかったという。「六〇年代のその政治的發展の殆ど総ては南北戦争への言及なしには理解されない」ほどである。マルクスによれば、「アメリカ独立戦争がヨーロッパ中層階級に警鐘を打ち鳴らしたように、一九世紀アメリカの内乱がヨーロッパ労働階級に警鐘を打ち鳴らした」と^{（30）}。選挙法改正運動はリンカン支持の宣言と直接結びつけられた。こうして改正運動を成功裡に展開するのに必要な組織的条件と階級連帯が生まれてくる。選挙法改正で連盟の書記長はブライトにいう。「アメリカ問題で貴殿がわれわれと同席されていることは：組合の政治的趨勢に大きな刺戟を与え、その刺戟を政治的領域に持ち込もうとするわれわれの努力に多大の助けとなります」^{（31）}と。北軍が勝利を収めたとき、ブライトの名声は忽ちの中に広がった。労働階級の間のみではなく、広く政界にもである。「孤立と失意」の後、再び彼は政治的に生きかえったのである。^{（32）}再生は彼のみでなく、急進主義運動がそうであった。チャーチズム運動の敗北で消沈し、穀物法廃止の決着でダイナミズムを失い、クリミア戦争でペースを狂わされて、

急進主義運動は全体的に停滞していた。五〇、六〇年代の好況は——その政治的影響は誇大視されがちであるにせよ——労働階級、特に急進主義運動の背骨をなしていた熟練労働者達の空腹と絶望感をやわらげもし、六〇年代半ば頃までは急進主義運動の促進に有利といえない環境をつくっていた。政治の世界はパーマーストン卿に支配されて安定し、急進主義運動はこの安定した政治の世界で重みのある挑戦をなしえなかった。⁽³³⁾急進主義者は外国人達の運動の信条を掲げること（アメリカでの南北戦争での北軍支持、六三年のポーランド人の蜂起支持、イタリア独立の支持とガリバルディの訪英での大歓迎など）⁽³⁴⁾で自からの運動を代位させ、そこに「慰め」を見出すだけであった。

急進主義が運動の停滞を脱したのは六〇年代半ば頃からである。ブライトの復活はその具体的な現れである。ノンコンフォーミストも一〇年間の政治的「休止」の後、政治的に活発に動くようになる。マチン教授によれば、国教会から閉め出されてからの二百年祭が行われた六二年以後からであったという⁽³⁵⁾（第三節参照）。穀物法問題が決着して以後の重要な争点といえば、対外問題を除けば、選挙法改正問題と、宗教及び宗教に関係した問題（教育問題など）であった。宗教上の争点は極めて重要であり、六二年には「議会は宗教会議になった」⁽³⁶⁾かのごとくであった。パーマーストンは争点の尖锐化を避けようとし、それにより成功したが、急進主義者はこうした問題をたえず提起していたのである。六一年にはグラドストーン蔵相により新聞紙税も廃され、安価な新聞の発行も容易になった。民衆は確かにそれほどよく新聞を読まなかったろうし、まして日刊紙を購読することは出費の点からもむずかしかつたであろう。廻し読みがなされておき（新聞の郵送は無料）、日刊紙購読は恐らく殆ど上層中産階級以上の人達に限られ、下層中産階級以下の民衆には手がとどかなかつたであろう。コブデンはいう。

「ペニー」〔印紙税〕が続く限り、中産・労働階級には日刊紙はありえない。貿易商や卸商の地位以外の誰が五ペンスの日刊紙をとれるだろうか。明らかに機械工や商店主の及ぶところではない。…民衆は金を払えないから日刊紙の機会をもちえない。…この國の支配階

級は印紙税の廃止に抵抗しているが、それは蔵入のためではなく、…日刊紙が寡頭制の道具となっていることを知っているからである。⁽³⁷⁾

△イスタブリッシュ△していたタイムズ紙も印紙税廃止に抵抗していたのである。それだけに印紙税廃止の意味は大きい。急進主義やノンコンフォーミストの政治運動が復活したことは様々の要因が重なっていたであろう。経済的不況の生起は確かにその一つであるが、⁽³⁸⁾それだけではあるまい。六五年パーマーストンが死去し、改革の動きを抑える重しがなくなり、なんとか試みられながら流れた選挙法改正への妨げが消える。パーマーストンに代り首相になったのは改正に積極的なラッセルである。とりわけ政治家——大蔵大臣として既に地位を確立していたグラドストンが急進主義に目を向け、△民衆のウイリアム△⁽³⁹⁾として登場してきたことの意義は大きい。彼は新聞紙税を廃し、新聞購読を民衆に近づけもした。

六五年、パーマーストン首相の下で行われた総選挙においても、既に急進派の台頭は現われていた。コブデンは六五年にこの世を去ったが、この選挙で一五〇人も新人が選ばれたし、またその中には急進主義者が少なからずいた。ミル、フォウセツト、ヒューズ、トレヴェリアン達がそうである。彼ら急進主義知識人が新たに政界に入り、急進主義がよみ返るのである。今や民主主義的傾向の信条をもち、大土地所有者の政治的影響力を抑しようとする都市的急進主義が自由主義陣営の中にわり込んできたのである。新しい急進派勢力——それはすぐ述べるように様々のタイプがあった——は、首相△党首ラッセルを別にすれば、ウイックにリーダーシップを仰ぐよりは、ギブソンやブライト、それにやがてグラドストンのリーダーシップに期待するようになる。⁽⁴⁰⁾ラッセルが首相になったことは、選挙法改正が行われることを予示させ、年来選挙法改正を主張してきただけにブライト達は一層重みを加えた。アイルランドの民族主義者、フェニアン派も活発に動き始め、労働組合の者（オジャー達）にこれに合流する者さえ現れてくる。このことも、この問題にかねがね関心を抱き（アイルランド改革同盟の副議長でもあった）一定の意見を表明していたブライトの政

治的重みを加えることになる。フェニアン達が過激な行動をとるようになる——六七年彼らはマンチェスターで仲間二人を救おうとし警察官を殺害したなど——彼はその行動を批判するが、⁽⁴¹⁾選挙権拡大を求めて六六—六七年大規模な大衆運動が起る。ブライトはこの大規模なしかし秩序ある運動を背景に改革に向けて——時々いわれたように彼は大衆を暴動にけしかけはしなかったが——⁽⁴²⁾保守党政府を脅し——警告さえした。民衆の大規模な運動の圧力がどの程度有効であったかは別とし、⁽⁴³⁾選挙法改正での立法過程で、選挙権拡大は拡大に向けてますますエースカレットし、当初構想されていた都市熟練労働者の範囲をこえ、バラでは原則として世帯主まで広げられた。こうして登録有権者数は改正直前の一三〇万人から二五〇万人にまで増加することになる。翌六八年この新しい選挙法の下総選挙が行われた。選挙戦中ブライトは各所をへ廻り、演説した。演説では、政権をとった自由党がまずもってなすべき政策として、アイランド国教会問題、教育問題、国防費支出問題があげられてる。⁽⁴⁴⁾グラドストン党首の下で行われたこの総選挙で自由党は大勝した（一一六議席の大差）。急進派もかなりの議席を獲得する。それがどれほどかは、それほど党や派のまわりがない当時の状況では、それ以後の議会での採決をみて判断するほかはなく、また争点の解釈いかんで人数は異なってくる。現代の計算では一〇〇から一二五名の間とされるが、これを多すぎるとみる歴史家もいる。⁽⁴⁵⁾七四年自由党が敗北した総選挙についてだが、急進主義的傾向をもつウイッグのハーコートによれば（七五年）、ウイッグの一五〇名に対して、急進派の七〇名である。宗教問題を中心にして急進主義議員をとってみるパリ教授によると、六八—七四年議会で一度でも議席をもった自由党議員四二四名中、急進派議員は一一五名となる。

グラドストン内閣が成立した時、ブライトは貿易相として入閣した。ミルは彼が、「今や進歩的な党の中にいない」と嘆く。この言葉は必ずしも当るまい。彼はウイッグないしアリストラットが多くを占めるこの内閣で他の閣僚と一体的になりえなかった。行政の経験もたず、苦勞し、神経症を再発させ、⁽⁵⁰⁾七〇年末閣僚を辞任してしまうのである。

選挙法改革運動は六七年に実を結ぶが、この時期はフェニアン党の行動が過激化する時でもある。この動きに合流する労働組合さえ現われてくる。アイルランドからの移民の流入によってかねがねその社会的・経済的・宗教的な諸側面への影響が懸念されていたが、六〇年代アイルランド人は政治的に活発に動くようになり、イギリス人はこれに多大の関心を抱くようになっていた。その折も折、六七年フェニアン達によるチェスター城監獄の襲撃計画の発覚、マンチェスターにおけるフェニアン派囚人二人の奪回行動での一人の警官の殺害、ロンドンの拘留所の外壁での爆発があり、国中が一ときヒステリー状態に陥った。グラドストーンもこれに大きな衝撃をうけた一人である。

フェニアン派の無法、とりわけイギリスへの彼らの侵入は、時の問題に深甚の影響を与え、重要なアイルランド政策の問題に目を向けさせたのであった。というのは、（私の見方では）イギリスとスコットランド双方で彼らは一般に人々の心的態度を全く変えてしまったからである。⁽⁵¹⁾

グラドストーンが以後政治的生涯をかけて取組むアイルランド問題への直面の始まりである。ブライトは以前からアイルランド問題に関心を抱き、四九年に一ヶ月ほどそこに行き、その悲惨さをつぶさに目で見てき、その処法（選挙法・アイルランド国教会・土地問題を中心）⁽⁵²⁾を提起していた。フェニアンの過激な行動は強く批判するが、アイルランド人には深く同情を抱いてきた。⁽⁵³⁾問題が深刻化してきたとき、彼の存在はさらに大きくなる。グラドストーンにアドバイスを与えていもいる。

ヴィクトリア時代において労働階級は人数からすれば圧倒的であり、肉体労働者をそうとすると、国民の八割を占めるといってよい。彼ら（その一部）は三〇年代末から四〇年代にかけて激しい政治運動であったチャーチズムの主体となつた。穀物法撤廃運動ではコブデンやブライト達としばしば衝突し対立した——彼らは中産階級に強い不信任を抱

いていた——が、その運動が撤廃のための警告として働いたことは否定できない。その後彼らの政治運動は鎮静化する。労働者独自の大衆組織としての労働組合の発展も比較的好い。北部大都市でさえ多くの労働者は小規模の仕事場で働いていたという事情がある。また労働組合は企業主に歓迎されなかつたし、余剰労働者も多く、ストライキは成功せず、不況期には特に崩壊してしまつた。とはいふものの、六〇年代には熟練工の間で比較的安定した^{（ニューゼラ）}▲新形▼の労働組合が結成される。合同機械工組合は早くから、大工・指物師合同組合は——一九九一六一年の激しいストライキの後——ASEに倣い、アプルガースによつて結成された。⁽⁵⁴⁾新形労働組合は、鉄鋼業、機械・技術、造船、印刷業、建築関係等々で働き、ASEのように近代産業で働く熟練工の間のみでなく、ASCJのように伝統的な仕事の職人達（熟練工）の間でも、また中小の企業で働らく人々の間にもつくられた。その多くは、それほど多くない▲リスペクタブル▼な人々である。

▲リスペクタブル▼な労働者マルクス主義者のいう▲労働貴族▼、労働階級中の一割ほどの人々に当らうが、熟練⁽⁵⁵⁾高賃金と妥協性^{||}保守性という性格づけを中心として規定されるこの▲労働貴族▼という概念は貧弱にすぎ、当時の▲リスペクタブル▼な労働者をとらえるには十分ではないし、また彼らを単に（政治的に）保守的であるとみてしまうこともできまい。一九世紀末C・ブリスは、ロンドンで定職をもつリスペクタブルな労働者とは、家族が毎日肉と野菜を食べ、飢餓に陥ることなく、日曜日の外出のため充分なお金を残しておくことのできる人々だといつてゐる。五〇年代でも労働者には中産階級向きの娯楽をいくつか楽しめる人々もいた。五〇年代には一日一二時間も働かねばならなかつたが、九〇年代までには九時間労働になつてきたとみられる。彼らはわずかな余暇をうまく利用できた。こうして中産階級と同様の生活の安定と楽しみをもちうる何千という労働者が生れたのである。当時のリスペクタブルな労働者は、熟練や賃金の多寡のみでなく、借家の質、質屋通いや借金の有無、子供の通学の規則性いかん、飲酒でのしまり、

日曜日に着るスーツは晴れ着の有無などの点、いわば性格や生活のパタンによっても他の粗野でだらしない労働者と区別されたのである。賃金の多寡は一定の生活パタンを支える限りは重要であるが、それだけでは当時の労働者の実態をとらえるには十分ではない。労働者は生活パタンで中産階級と区別されるが、またリスベクトブルな労働者はそうでない労働者と生活パタン、あるいは性格によっても区別されるのである。彼らの社会的、政治的行動もこれと密接に関係してくる。⁽⁵⁶⁾

▲リスベクトブルな労働者は一定の生活パタンをもち、この点で中産階級と異なるが、中産階級と共通するエトスをもっている。それは自助の精神である。それはS・スマイルズによって説かれたもの、自己教化、自己抑制、精力、勤勉、節約・儉約、慎重、忍耐、ねばり、正直、廉直、節制、節酒、独立、勇らしさ、責任感などである。それらは中産階級で重んぜられるエトスである。スマイルズはこれらを労働者にも説いた。彼が当初それをリーズで説いたのは夜学校の一〇〇人ばかりの労働者を対象にしてである。⁽⁵⁷⁾ やがて行われる講演や出版される書物で労働者のみでなく、広く行き渡ったのである。ただ自助のエトスも、根本的には中産階級のものと同じであるとしても、現われ方に違いがでてくる。労働者の場合、労働組合や友愛組合・建築組合・貯蓄組合・協同組合の形成としても現れてくるからである(スマイルズも一定の意味でこれらを評価する⁽⁵⁸⁾)。組合はかなり高額の拠金を徴集し、友愛協会などとして登録され、組合員に一定の魅力的な福祉給付を行う。六〇年代には労働組合会議も創設され、労働組合の法的地位の改善に動き出した。六七年には労働組合の在り方を検討する王立委員会が設置された。委員会報告の多数派は労働組合に好意的ではなかったが、七一年グラドストーン内閣は少数派の意見をとるに至り、労働組合に法的地位を認め、登録された組合の資金に保護が与えられるようになった。新法によってはストライキに対する規制はより厳しくなったが、デイスレリ政府は七五年ピケッティングも平和的なものであればこれを認めるとして、規制を緩和する。

四八年以後チャーチズム運動は無力化した(穀物法廃止問題も決着した)が、チャーチズムの思想——運動ではなく——は生き残った。男性の普通選挙権、秘密投票制、議員給与の主張がそうである。六〇年代選挙権拡大をめぐりながらチャーチズムの思想、あるいは一般に労働者独自の思想が——少なくとも社会主義的思想・組織が生れ広がる八〇、九〇年代以前に——労働者の思想や運動の強力なバネになったかは、はなはだ疑問である。少なくとも政治的に、彼らを動かしていたのは、中産階級の知識人や急進主義者の思想・精神であった。政党政治の側面からいえば、**自由——労働主義**といわれるものがこれである。オックスフォードのある経済学の教授は、混乱の時期、労働階級に向かい、彼らが信頼する教師やアドバイザーを通じて働きかけるべきだといったし、「**ニューモデル**」の雇用者も労働組合の指導者を啓発しようとした。⁽⁵⁹⁾

労働者が政治的に中産階級と共同行動をとりうるといふ思想はプライトも抱いた思想である。労働階級にも有権者の範囲を拡大しようという彼の主張にもこれは現れている。六五年——**バーミンガム自由主義協会**設立のしばらく後——彼は「**バーミンガム**においては**中産階級**は**労働階級**と心からともに動こうとしており、私は深い結びつきが生まれることを望むもの」であるといっている。⁽⁶⁰⁾自由党は中産階級のみならず、急進派や改革派を通じ、少なくとも労働階級の一部、職人層・熟練工、また彼らの組織である労働組合や友愛組合のメンバーをひきつけ、とりこもうとした。これが自由——労働主義といわれるものである。これは現にかなりののいで実現されたといえるであろう。それは**ニューモデル**の雇用者**政治家**と**ニューモデル**の労働者**指導者**の間に典型的にみられる。エルコ卿(炭坑・製鉄)とA・マクドナルド、S・モーレイ(靴下製造)とG・ホウエル、マンデラ(レース製造)とアブルガース、クロウゼイ(製鉄)とJ・ケインその外である。労働階級中心の『蜂巣』紙や『コモンウェルズ』紙はモーレイ、ケル家

やE・ポッターから財政的支援をうけたことがある。⁽⁶¹⁾

△ニューモデル▽の雇用者と労働者⇨労働組合の妥協や強調を可能にする要因はなんであろうか。R・ハリソンは、一方で、「産業関係においては妥協への、政治においては中産階級急進主義への志向をもち」、「国の中で増大するパイのうちより大きな分け前以上のものを求めず、△憲法の枠▽の中に連れて行かれ」、熟練と高賃金、妥協と保守的性情をもつ「労働貴族」の存在を力説し、こうした労働者の志向や性格に適合し、それを助長させるニューモデルの雇用者の存在を対応させる。これを可能にする基盤は経済的側面での利益の合致である。「ニューモデルの雇用者の動機は様々で複雑だが、彼らは露呈された財産の立場と外部からの支持を見出す必要との意識をとくに分けもつた。そのゆえに労働貴族と折合いをつけ、その指導者に言い寄る。これら指導者たちは千年王国の望みをかきたてることができなくとも、パイの分け前でのリアルな期待を持続させることができた。労働者の指導者は黙示録的な予言と革命運動に疲れ、それ以上のものをめつたに求めることをしなくなった。」⁽⁶²⁾という。パイの分け前を大きくし、妥協や協調を可能にし易いのは大企業の方であろう。大雇用主（それも二代目以下）の方が労働者により寛大で気前がよりよいものだ。「六〇、七〇年代多数の大雇用主はとりわけ労働組合に、また一般に労働運動に新たな積極的アプローチをなした」⁽⁶³⁾。エルコ卿も、マンデラも、モーレイも、クローゼイも大企業主である。これに対応したのが労働貴族であった。後者も（人夫や土工など）非熟練の労働者を無視しても、あるいは蹴落してまでパイの分け前を大きくしようとしたのだ、という。

雇用主と労働者、中産階級と労働階級（一部）の協調や共同行動は経済的利益の観点から可能となったのであろうか。大企業においてそれはより容易であったのであろうか。われわれの扱う世代の者をとりあげれば、ノッティンガムのレーヌ製造業者の議員である前述のA・J・マンデラ（二五―九七）が典型的人物であろう。彼は確かに大雇用主ではある。マンデラは⁽⁶⁴⁾いう。

私は、労働組合会議のメンバーが孤立した状態におかれないことがこの上なく望ましいと考えております。ノッティンガムとリーズでの最近の会合では、この人達は市長によって歓迎され、またかなり多くの雇用者がディナーなどに出席し、会合の雰囲気や和げまして、放っておかれたならそうなったような排他的な階級的性格をとり除いたのです。さらに私が考えますのに、自由党のセンシブルな雇用者は労働者の生活を改善する傾向のある合理的で賞賛すべき性質の骨折りでこの労働者の会議に対する共感を表わすべきです。(七三年一月三一日)

ハリソンはニューモデルの雇用者と労働者との関係を力説する。しかし彼はその関係を経済的なタームでみすぎている。この関係にはエトスの共通性からくるもの、さらには生活パタンの共通的要素からくるものをみなければならぬ。それを端的に示すのが労働者の出世物語りであり、出世した雇用主のエトスと、彼が労働者に寄せるべき共感の力説である。一九世紀——前半ではなく——中葉以後よく読まれた大衆小説の筋の骨組は、極貧に生れ、しばしばスラムで育った孤児が、勤勉と挫折、困難の克服を通じて実業に成功し、やがては教養を身につけるといふもの(英国版「おしん」)であった。こうした小説の舞台はしばしばマンチェスターにとられる。⁽⁶⁵⁾『マリアン・ウイザーズ』(五一年)もその一つであり、ここでは自助と自己改善——「仕事の福音」——の神話が描かれている。しかし同時に、粗野な工場主に人間味のある方法を薦め、自由主義的で改革主義者の中産階級と労働階級内の職人的部分との間のつながりをつくらせようとする。

ジョン・ウイザーの雇っている職人については、その条件の改善には目ざましいものがある。読書室がつくられ、「社会的道徳的責任というより古くからの中産階級の文化的伝統を代表する共同経営者であり、妹と結婚する」カニンガム氏がこれに百冊もの書物を寄贈し、図書館にしようとした。ジョンはこれに、カニンガム氏が推す雑誌とともに、いくつかのロンドンの新聞と最良の地方紙を加えた。拠金は週三ペンスであった。…カニンガム氏はまた小さい望遠鏡と顕微鏡を贈った。この器具がみせる驚異はこれら粗野で半野蛮の人々の心

の中に知識への渴望の強い刺戟を与えたのであり、彼らの習慣やマナーの変化には驚くべきものがある。別人種になったかのごとくである。ここに描かれている像が実像であるとは限るまい。△貪欲な企業家▽は多かつたであろう。しかし少なくとも理念は別であるし、またそれが少なからざる雇用者のエトスの重要な部分となつたことは十分に考えられる。少なくともニューモデルの雇用者達などの自由主義的産業家は労働者の指導者と個人的にも接解し、彼らを教化しようとする慣習をつつた。貧困な労働階級への態度や対処は、一般に、パイの分け前というレベルのみではなく、エトス、さらには教養や生活パタンの共有や共有への奨めがあつた。

労働階級の側もこれに呼応した。一部の労働者はパイの分け前を大きくしようとするだけでなく、中産階級と同じく自助のエトスをもつた。やがて独立し、成功して雇用者にまでなつた例はいくらでもある。⁽⁶⁷⁾他方、自助は組織作りのエトスともなつた。当時はニューモデルの労働組合や友愛組合、あるいは協同組合の形成期であり、それらは自助の組織形態であつた。これら組織によってえられる福利や便益のために、メンバーは自から多額の拠金をなしたのである。確かにストライキは行われ、それもしばしば暴力的になつたが、世紀前半でのような過激なイデオロギーをもつてではなかつた。こうした労働組合の行き方は大工・指物師合同組合の書記アプルガースの言動によく表われている。「彼が育成しようとしたのは世紀中葉の新しいムードと調和でき、新しい中産階級の労働者が納得できるようなチャーチズムであつた」⁽⁶⁸⁾。実際、労働階級の指導者としての彼の顕著な才能の一つは「中産階級敵対者の偏見をなくすこと」（ウエツブ夫妻）であつた。前述のマンデラは「彼がこの国の最良の人々いく人かが彼を友人と呼ぶのを誇りにしている」といつているのである。⁽⁶⁹⁾

大企業の方が利益の分け前は大きくなるから、そこの方が雇用者と労働者の妥協と協調はより容易であるといえるであろうか。確かにモーレイやマンデラは大雇用主であつた。しかし彼らがニューモデルの雇用主であつたのはそのた

め（ばかり）ではあるまい。実際、規模がそれほどない工場においても、雇用主と労働者の関係は協動的でありえた。そこではフェイス・トウ・フェイスのパーソナルな関係がありえたからである。パーミンガムの工場は中小規模の工場が圧倒的に多いことで知られる。大規模企業があまたあるマンチェスターとこの点対象的である。政治的にも対照的であった。マンチェスターでは、▲ピーターラーの虐殺▼はじめ、中産階級と労働階級の対立が際立っている。第一次選挙法改正の運動の時はこのため運動のリーダーシップをとれなかったし、チャーチズムの時代はチャーチストと反穀物同盟は鋭く対立した。工場法制定の時もそうである。マンチェスターでは急進主義的勢力も強く、運動はしばしば過激になる（選挙法改革時や四二年の発火栓暴動）が、これに対抗する勢力も強力であった。これに対し、中小規模の工場の多いパーミンガムでは、雇用者と労働者、中産階級と労働階級の協調と共同行動は著しい。政治的にも同様である。コブデンは五七年——ブライトがマンチェスターで落選した年——コブデンは、「社会状態」がマンチェスターよりもパーミンガムの方が「道徳的政治的により健康で自然である」とし、「巨大でどうにも越えられない深淵が労働者と雇用者をひき離しているランカシャーの町でよりも、そこでは総ての階級の交流がより自由である」といつてい⁽⁷⁰⁾る。マンチェスターで落選したブライトを程なくうけいれ、議会に送りこんだのはパーミンガムであった。中産階級と労働階級の政治的共同行動はまさにパーミンガムの政治的伝統ともいえる。第一次選挙法改革の時両階級はアトウッドに率いられてパーミンガム政治連合をつくった（改革運動で全国的にリーダーシップをとったのはマンチェスターよりもパーミンガムであった⁽⁷¹⁾）。六五年にはパーミンガム自由主義協会が結成される。それは改革同盟^{リッパム同盟}という全国組織と密接な協力関係をもつが、この組織こそまさに六七年の選挙法改正にまで至る戦いにおいて広範な労働階級の支持を獲得したものである。チェンバレンの自由主義はこうしたパーミンガムの土壌に根ざしたものであった。世紀前半の産業都市の政治の特徴を表現したのがマンチェスターであるとすれば、世紀後半のその特徴を表現するのがパーミンガムであ

(72)
つた。

中産階級と労働階級の協調と政治的共同行動を可能にした要因は種々あろう。ニューモデルの雇用者と労働者Ⅱ労働組合との間の経済的利益の分け前での妥協のみではない。世紀後半にも、バーミンガムに典型的にみられるように、中小規模の工場はかなり多く、そうしたところでの雇用者と労働者の密接なパーソナルな関係に着目せねばなるまい。さらに力説すべきことは、共通の政治的敵あるいは競争者が極めて強力であり、ともにこれらに当らねばならなかったということである。即ち、支配層であるアリストクラシーが強力であつたし、また国教会がこれを強力に支持していたのである。保守党はむしろのこと、自由党においてもウイックはなお強力で、その主力はアリストクラシーであつた。保守党に勝たねばならないことはむしろのこと、自由党内で発言権をますためにも、中産階級や労働階級の指導者はウイックの勢力に対抗してゆかねばならなかつた。保守党は国教会を護持してゆこうとしていたし、ノンコンフォーミスの要求に受容的であつたとはいえ、ウイックも同様であつた。アリストクラシーの支配を弱体化させようとすれば、その精神的支えである国教会の優位をさり崩してゆかねばならない。それゆえにノンコンフォーミストの行動は重要となってくる。ノンコンフォーミズムは中産階級と労働階級とを橋渡しする重要な一つの要因であつた。マルクス主義者や世俗主義的歴史家は一九世紀におけるアリストクラシーの政治的支配と国教会の重要性を十分に理解していなかつたように思われる。

中産階級と労働階級、雇用主と労働者の共同行動は単に経済的利益の共通性に基づいたり、アリストクラシーと国教会のイスタブリッシュメントに対抗したりするためでもあつたが、それだけでもない。双方のエトスや生活パターン・文化に共通性と共感があつたためでもあつたであらう。ノンコンフォーミズムのここでの重要性も、国教会に対する対立という要素にのみではなく、それが双方の階級のエトスや生活パターン・文化の共通性と共感を生みだした点に着目さる

べきであろう（次節で述べる）。ここではこうした共通性や共感を生み出すものとして自発的結社をとりあげることにする。サロンが上層階級を中心にした集まりであるとすれば、それ（クラブや協会）は中産階級を主体にして、一八世紀末から一九世紀にかけ——社会の変動期に——広がり、やがて（リスベクタブルな）労働者の中に滲透したものである。教会や職業・労働団体（ギルドなど）も自発的結社といえるが、この時期に発達したものは、まとまりが緩く、入・脱会が比較的自由的な、あるいはよりルースなグループである。⁽⁷⁴⁾

こうした自発的結社のうち、人々が多く集る典型的なものが△文学・哲学協会▽と△機械工協会▽であるということができる。前者は既に一八世紀から町々にできた。マンチェスターで創立されたのが一七八一年、ニューカースルでは九三年、シェフィールドでは九六年である。都市の文化でいどはこの協会の有無で評価されたほどである。これらの文学・哲学協会に加わったのは中産階級、それを指導したのが地方の文化的エリートであり、これには労働階級はまづいかなかった。これに対し機会工協会は一九世紀、特に進歩の時期の産物である。それは総ての階級の者に知識を広めることを目指したものであったが、とりわけての標的は熟練労働者であった。⁽⁷⁵⁾ その目的の一つが協会の指導者達の権威と特権を安定化し正当化するような、産業社会での一定の社会関係をつくり出すことにあったことは否定できまいが、——そのためにでもあるが——富と権力をその手に集中したエリートによって創られ指導される「独立的で、勤勉努力する、自己規律のできる小財産所有者の社会」⁽⁷⁶⁾をつくる出すことは、機械工協会の目的であったといえる。

節酒運動は数千の者を誘惑から遠ざけ、機械工協会と読書室とは彼らに多くの役立つ学習を与える。⁽⁷⁷⁾

ある有識者はリーズの機械工協会を弁護し、一般民衆の「正しい指導は主として広範な教育制度の採用いかんにかかっている」といっている。⁽⁷⁸⁾ S・スマイルズが労働者に向って「自助」のエトスを説いたのはここリーズであった。⁽⁷⁹⁾ 中産階級による労働階級の指導というこうした側面が最もよく現れていたのは日曜学校制度である。リーズのペインズはいう。⁽⁸⁰⁾

〔日曜学校は〕一般に労働階級からの四〇万人の生徒に対し、一般に中産階級からの六万人の教師の側による一種の監督である。…それは二つの社会階級の間の最も重要な連帯をなす。

機械工協会や日曜学校は、地主—小作関係や産業的村落、伝統的な作業場でのような関係はつくりえないとしても、「新たなバターナリズムの制度的形態をつくらうとした」のであり、「しばしばそれに成功した」⁽⁸¹⁾のである。

自発的結社は中産階級のエリートを中心に発展し、労働者達を△リスベクタブル▽な存在にした。階級間の分離を消すことはできなかったかもしれないが、共通のエトスや文化の一面をつくりだし、両階級を少なくともながしかな近づけたのである。

労働組合会議^{TUC}の形成さえこの過程の一端を現している。ニューモデルの労働組合が自助、とりわけストライキや失業、疾病や老後など、いざという時のための自助の組織化であり、労働組合会議^{TUC}はそうした組織の拡大という側面をもっていた。しかしその生い立ちをみると、それだけではないことがわかる。TUCの創設には五〇年代半ばに——ブルームの旗頭のもとに——創設された学会、「社会科学協会」^{Social Science Association}との関係があった。この協会は毎年秋大会を開き、社会的政策や改革全般に亘り公開のフォーラムを設けて討論した。大会は開かれる地方の都市のみでなく、全国から参加者が集り全国的に報道される。それは「しろうとの議会」⁽⁸²⁾であり、最初の書記によれば、「社会的に高度に重要な政策の討論を促進し」、「そうした討論についての情報を広め」、「国民の利益になるように政府や立法の作業に影響を与える」ことを目指した。「思想家の思想と政治家の提案」をかみ合わせるものだともいわれた。⁽⁸³⁾首相クラスの者（ラッセル、グラドストーン、ローズベリ）も加わったことがあるし、貴族や議員も少なからず関係していた。ミルも報告したことがある。大会が開かれる都市の商工業者も加わり、協会は基本的に中産階級のフォーラムであったといえる。だが、労働階級の者もよく加わり、時に報告もした。ドイツの経済学者ブレンターノは、合同機械工組合の

歴史書の中で、執行部が五九年当組合及び他の労働組合の立場が誤解されたままにならないよう、ブラッドフォード大会に代議員を送ることにした経緯を述べている。⁽⁸⁴⁾ところが六五年大会直後、協会担当者から労働組合側が不利になるよう扱われたという疑惑が起こった。これが労働組合大会設立の刺戟となったとされたのである。この刺戟にどのくらい比重をおくべきかは検討する必要があるが、TUCが当時SSAの分枝とみられることがあったのはまちがいない(タイムズ紙(八二年)は、TUCが「労働者の立場での社会科学協会である」としている⁽⁸⁵⁾)。が、注目すべきことは、SSAが自由党の議員やマンデラやS・モーレイなどの進歩的雇用者達のみならず、組合指導者達の集りと討論の場になつていたということである。六〇年代自由—労働主義の一つの基礎となつたのはこうしたものである。

中産階級と労働階級、少なくともその一部は一定の同質性の感情をもつ。それが「ヴェクトリア時代中期の産業資本主義の構造とエトスに根ざす⁽⁸⁶⁾」(のみ)といえるかはなほ疑問だとしても、「自由主義として知られるようになった広い国民的政治文化として」結晶したであろう。「労働階級は宗教的、社会的要因から生まれる同じような精神状態をもちながら、中産階級とともに真の自由主義者になつた⁽⁸⁷⁾」のである。筆者が特に注目してゆくのはその「宗教的」要因、ノンコンフォームズムである。

一九世紀に発達した自由主義は産業社会内の根本的な階級対立なるものを認めるのを拒否した。自由—労働主義⁽⁸⁸⁾、あるいは有機的に統一された資本主義体制内でのバランスのとれた関係という観念は自由主義的思想と慣行の一定の段階を表すものであった。即ち、この段階は「労働者⁽⁸⁸⁾を一つのセクションとして扱う在り方と、彼らを一つの階級として扱わねばならないという在り方との間に、不安定で曖昧に浮いている」段階である。労働者は自由党内の一セクションという位置から、やがて「一つの階級」へと変り、自由党とは別の政党政党⁽⁸⁸⁾、やがて労働党によって代表されるようになる途上にある。

自由—労働主義はこうして多くの急進主義的思想家や政治家によって説かれ、現に実現されもした。ブライイトもこの立場に立つし、多くの急進的知識人もそうであった。自由党は都市で強く、都市自由党の中では急進派が重きをなしてくる。知識人はこの急進派の中で重きをなしてき、六〇年代半ばには政界に入るのもで、国の急進主義の中でも重要な役割を果たすようになるのである。ブライイトは知識人も接觸をもった。ペリオールのグリーンとは六〇年代初め文通を始め、六四年にはオックスフォードで彼と会い、その折ゴールドウィン・スミスとも会った。自分も一八歳でこの大学に入れたらよかったのにと呟いたといふ⁽⁸⁹⁾。グリーンは——ミルの急進主義を支持するが、ミルと違い——根からのアカデミー界の人間であった。それでも、国の政治で活躍することはなかったが、オックスフォードの市会議員となつて活躍した。ブライイトはイギリスの実証主義者とも關係をもった。五〇年代半ばすぎ、「国内では政党が解体し、国外ではクリミア戦争とインドでの反乱が起」つているとき、ふんまんやる方なく新しい信条と組織を模索していた若き実証主義者が称賛を惜しまなかつた唯一人の政治家は、「失意と孤独」の中にあつたブライイトであつた。彼らは「教育あり深慮ある人々がアリストクラットに対するブライイトの攻撃に心底から加わるよう公衆に示そうとした」のである⁽⁹²⁾。南北戦争の時も北部支持のために実証主義者が開催した集会でブライイトは演説した⁽⁹³⁾。しかし実業家でもあつたブライイトは知識人をあまり信用しなかつた。彼と知識人議員とは互に疑念を抱いていたであらう。知識人は知的教養はあるものの、当り前のことがわからないことのよくある△頭のよい子供▽なのであつた⁽⁹⁴⁾。とはいえ少なからず接觸はあつたのである。

自由主義的知識人にも様々のタイプがある。もちろんウィッグの知識人もおり、彼らはウィッグ内で重要な地位を占めるようになった。彼らにも自由主義的改革に積極的な者も少なからずいる。ペリオール関係の人達をとるだけでもよい。その中でも、ゴッシェンやフレマンテルやプロドリック、さらにはダイシー(何れも前述)はウィッグ知識層内で

も有力者である。彼らは大学でのみならず、より広い政治での自由主義的改革にとり組んだ。ウィッグ知識層の中でも自由主義的改革に積極的な人達も少なくないのである。前にもあげたフレマントルは僧職についた後、ペリオールのフェロウとなり、教会改革において指導的な役割を果たし、プロドリックはジャーナリズム（タイムズ紙）で活躍した後、マートン・コレッジの学寮長となり（八一年）、大学改革に努力した。二人はゴッシェンと同じ齡のペリオール卒業生である。六〇年代三人とも大学の急進的改革主義者となり、議会改革、大学での宗教審査廃止、教会地方税の廃止など、この時代の典型的な改革問題に打込んだ知識人である。⁽⁹⁵⁾プロドリックは八〇年代議会改革の気運が高まっている時、雑誌『一九世紀』にデモクラシー容認の論説を掲載した（八三年）。トクヴィルを引用しつつ、デモクラシーの不可避性を認め、その欠陥を慎重に阻止しながら、その長所を生かしてそれをうけ容れてゆくべきことを説いたのである。これら自由主義的知識人は国教会僧侶の保守的な傾向を嫌い、著しく反教権的となった。⁽⁹⁶⁾法律家であり、歴史家となったダイシー（ペリオール）も同じような立場であった。⁽⁹⁷⁾とはいえ、彼らは国教会の広教会派的擁護者であって、これから述べる非国教化を主張する合理主義的、あるいは世俗主義的急進主義者とは区別されねばならない。

急進主義的知識人はこれらウィッグの改革主義的自由主義的知識人とはかなり明瞭に区別できる。彼らは何よりも合理主義者である。その合理主義は同時に大衆の非合理性の拒否と不信と表裏をなし、またノンコンフォーミストによくある宗教的熱情とは無縁であって、これに軽蔑の目を向ける。こうした点ではウィッグと共通である。他方彼らにとつては、国教制なるものは封建制の遺物であり、⁽⁹⁷⁾また教育は宗教と切り離され、世俗主義的でなければならぬ。この点ではウィッグと全く異なる。非国教化と教育の世俗化は彼らにほぼ共通する政治信条である。G・スマスは、自由党をウィッグ・アリストクラシーの手から引離したことでグラドストンを評価した。⁽⁹⁸⁾これら多くの合理主義的自由主義者は——ハーヴィのいうように——⁽⁹⁹⁾福音主義の家庭で育ち、そこで植え付けられたこの福音主義的信仰を世俗化させ、救

済における自己責任という信条を維持しながら、それが理性のコントロールによってなされる、と考えるようになったのである。

ウィッグの自由主義者は、F・ステイヴンがミルの『自由論』に対してなした批判に最も手厳しい形で現れているように、ミルの考えに対して多かれ少なかれ厳しい批判をもっていた。他方、ミルを師と仰ぎ、彼の先導に従う自由主義の急進主義的知識人は少なからずいる。兄のF・ステイヴンと違い、ミルを師と仰ぐ急進主義者となった弟のL・ステイヴンは、兄がカーライルの影響によって権威主義的になったと嘆く。急進主義者でも学究的な者であれば多くはミルを師と仰ぐ。彼らの本領は権威主義と精神的隷従の拒否であり、まさにミルが発展させた理論の支持者である。完全な討論の自由は人類の道徳的再生を促すために不可欠である、というのは、国の権威の束縛から解放されて、様々な学派の間で自由な競争が行われてはじめて、人々が、キリスト教であれキリスト教以外のものであれ同じように、その中にある最も高い精神的要素を分別してひきだし、それを通じて最も効果的に倫理的精神的嚮道を可能とするからである。道徳律は知識の拡大によってより明瞭に開示され、よき生活と共同体のまとまりを促進させる。道徳律が階級やセクトのエゴイズムをとり払い、人々の間の共感を促進するようになるからである。こうしてこの人達は伝統的なキリスト教神学を拒否した。また不自然な便益を与えられている宗教（国教）はどんなものであれ新鮮さを失い、沈滞し、無味乾燥で形式主義となり、陳腐なものとなる、とする。また彼ら学究的自由主義者はノンコンフォーミストととも一体的とならない。それは後者にしばしばみられる宗教的熱情のためである。彼らによれば——ミルもそういつてのごとく——教育制度の充実は緊急の課題であるし、またさしたる困難もなくなしうるはずであるのに、それが容易に進まないのは、宗派の対立によって妨げられているからである。教育の世俗主義が彼らの信条である。彼らは、実証的知識の進歩によって、道徳的紐帯が発見され、社会や人類の改善が促進されるとする点で、実証主義者と共通する。大

きな相違は実証主義者が説く宗教的メッセージにある。これは自由な言論と討論によって進歩が促されるという彼らの論理と真向から対立するからである。

パリ教授はこうした急進的な知識人で有名な人物としては、ミルのほか、小説家のG・エリオットと『ウエストミンスター評論』のJ・チャップマンをあげることができる⁽¹⁰⁾としている。大学関係者としてはまずもってH・フォウセツト

(三三一―八四) がいる。ミルを師とも仰ぐケンブリッジ大学経済学教授であり、六五年自由党の議員として選ばれた。

余りにも党主流に反抗的なので、七〇年代初め党籍を奪われたほどである。彼に従うものとしては、C・テイルク、A・ハーバード、W・モリソン、E・フィッツモリス卿がおり、これにG・O・トレヴェリアン、G・J・シヨウ・ルフェール、C・C・クリフォード、サー・D・ウエッターバーン、A・ジョンストンを加えることができる。急進的な知識人としてはさらに、組合教会派の牧師であったが、しだいに異質の考えをもつに至り、職を辞し、ロンドン教育庁の最も攻撃的な世俗教育主義者となるJ・A・ピクトン(三二二―一〇)も挙げねばならない。オックスフォード大学近代史講座の教授であったが、やがてそれを辞してアメリカに渡るゴールドウィン・スミス(二三三―一〇)や同大学の経済学の元教授で、僧職を辞し、自由党の議員になるT・ロジャーズ(二二二―九〇)もいる。またF・ステイブンの弟で、ケンブリッジのトリニティのフェロウとなり、僧職に就いたが、やがてそれを辞するジャーナリストのL・ステイブン(三二二―〇四)もそうである。少数だが、ウィッグ・アリストクラシーの自由思想家も加えることができる。ラッセル首相の息子のアンバリ子爵、義理の兄妹のL・スタンレイとカーライル伯夫人などが典型的⁽¹¹⁾であろう。ここではフォウセツトを紹介するにとどめたい。

大学の急進主義者は、ウィッグとノンコンフォーミストが主流をなす自由党内で独特の位置を占めた。彼らは共通の明確な原則を持っていたわけではないが、自分達が支持する自由党が十分に急進的でないとする点では一致している。

彼らの立場は六七年公けにした『改革論』 *Essays on Reform* と『改革された議会の諸問題』 *Questions for a Reformed Parliament* の中によく表されている。その中で彼らは世代の不満を仮借なく表現した。寄稿したのは若いドン、ジャーナリスト、訴訟依頼のこない弁護士、野心ある政治家達である。フォウセツトはこれには寄稿していない(ケンブリッジよりオックスフォードの者が多い)が、彼らとはよく会った。様々の立場の者がおり、彼らは内部的にまとまっていたわけではないが、政治的意見で共通なところが少なからずあった。議会改革を支持し、イタリアのナシヨナリズムに共感し、南北戦争では北部の側を支持し、労働組合、協同組合による生産と配分を法的に認め、法の成文化と法手続きの体系化を進めようとし、教育助成の再配分と、大学の宗教的教育的改革を實行させようとした(104) (彼らは五〇年代末から六〇年代にかけて社会科学協会で論文発表をしている)。フォウセツトは彼らと近づき、六〇年代大学での宗教審査の廃止にむけて、努力を始める。六五年議員になってからは、自党政府の政策のなまぬるさ(105)にがまんがならず、執拗に政府の政策に反対するこれら大学の急進主義者、「若く金持ちで教育ある騒々しい人達」(106)——彼らと同じ原則を共有しているわけではなかったが——のリーダー格になった。政府にとっては扱いにくい存在であったが、バジヨットのものと思われるイコノミスト誌のある論説によれば、フォウセツト以上に「庶民院で有用な議員」はいないのであった。

H・フォウセツトは一八三三年ソールズベリーの呉服商の息子として生れた。父は熱心な自由主義者で、反穀物法同盟の一員であった。ヘンリは大学生の時事故で完全に盲目となったが、強力な意志と挫けることのない樂觀と野心で、盲目であることを以後の人生で有利にさえ役立てたように思われる。結局ケンブリッジのトリニティ・ホールを出た。有名な彼の伝記を書いたス・ステイヴンはこの時からの親友である。フォウセツトはパーブリック校出身ではなく、商人の息子であり、大学では△少数派▽であった(107)。五六年フェロウになった彼は大学やアカデミックな業績を高く評価する。「富や地位によって保障される必要のない熱望される名声というものが外にあらうか」(108) 大学改革にも熱心であった(109)。

五〇、六〇年代は大学改革が盛んに論じられ実行された時であり、彼のようによつて、この時期大学を卒業した者には自由主義や急進主義に流れた者が多い。⁽¹¹³⁾ 彼はアリストクラシーやその土地所有に強い批判をもっていた。「君主制やアリストクラティックな制度に現れてる世襲の原理と、性別いかんによる社会的政治的特権総てに對し」敵意を誓うケンブリッヂ共和主義サークルにも属した。⁽¹¹⁴⁾ 結婚したのはフェミニスト運動のリーダーの一人となるミリセントとである。⁽¹¹⁵⁾ 彼が師と仰ぐのはミルであつた。五九年ブラッドフォードで開かれた広範な人々（多くは自由党系）が集まる学会、『社会科学協會^S』での——労働者問題に関する——発表をへア（比例代表制の提唱者）に認められ、彼によつてミルに紹介されたのである。六三年ケンブリッジの経済学の教授（マーシャルの前任）に選出され、二度の落選の後、六五年ミルと同時に議員に選ばれた。

彼はコプデンの伝統に従い、レッセフェールの原則をかたく信じ、過剰な立法に敵対的であつた。

自助と慎重とが疎んぜられれば民衆の状態は改善されえないし、あらゆる社会問題についての国の政策は自助の欲求を示さない人々を助けるのに何の役にも立たない、という原理によつて導かれるべきである。⁽¹¹⁷⁾

自助を信ずるのである。ただ例外はある。その典型的なものは、彼が何よりも関心をもつ教育、特に初等教育の領域である。その理由は二つある。六〇年代に現にそうであつたごとく国の関与なしには全く進まない場合である（これは経済の領域でも同じである）。また一つには、援助のうけ手が未成年で、援助がなければ、両親によつて無知の状態に放つておかれる場合である。⁽¹¹⁸⁾ 七〇年の初等教育立法では義務制がとられていないことを批判した。⁽¹¹⁹⁾ ただ国の介入については教育は例外的なものであり、彼は当時立法の領域が広がりつつあることに批判的であつた。労働時間立法においても、「大人が働かすぎるとしても、それは自分の意志からである」と、⁽¹²¹⁾ 反対した。彼は正統派にならない、賃金基金説をとる。だがミルと同じく、一定の範囲では労働組合やストライキの有効性は認めた。⁽¹²²⁾ 労資の共同経営であればよりよい。経済

の側面からの自由—労働主義の正当化であったといえよう。彼は経済学者としては獨創性がなく、二、三流といわれるが、彼が際立った存在となるのは、議員としての、特に教育問題における執拗なまでの活動であった。

フォウセツトは急進派ノンコンフォーミストとは近くはなかつた。ブライトともそうである。彼らは初等教育問題で不必要に宗派の問題にこだわりすぎるといふ。「自由主義の意見を代表するようになった成り上りの中産階級〔産業家〕を信頼しなかつた」⁽¹²⁵⁾。ケンブリッジとマンチェスタの溝であり、六八年選出されてきた——その多くがノンコンフォーミストであつた——新産業家や製鉄業者の自由主義とはそりが合わなかつたのである。⁽¹²⁴⁾ 実際彼は△合理主義的な学究的不可知論者▽であつたといえる。彼が評価する勤勉と努力という美德も、信仰とは全く関係がなく、それどころか宗教など社会の進歩に妨げとなるといふのである。⁽¹²⁵⁾ 宗派の争いなどはその最たるものであつた。グラドストンとの彼の相違もその根の一つはここにある。

フォウセツトは当初財政問題からグラドストンを高く評価して⁽¹²⁶⁾いた。しかし宗教に関しては二人の間に共通点は全くなかつた。グラドストンは高教会派として宗教∥教会問題に極めて敏感であり、教育制度においても宗派教育を何とか生かそうと努めた。ドグマのない宗教や宗教教育などありえず、△非宗派的宗教教育▽（ウィツグの立場）など軽視して、教育立法に臨んだ。⁽¹²⁷⁾ フォウセツトはこれと対極的であり、新しい公的初等教育は△世俗主義▽であるべきだとした。大学でも宗教審査は廃止すべきであるし、フェロウシップも僧職就任と切離すべきだとする。旧二大学をも念頭におきながら、アイルランドのトリニティ・コレッジでの宗教審査問題をとりあげ、六八、六九、七〇年、（七一年にはとり下げたが）七二、七三年と執拗にこの問題を議會に提起した。余りに政府∥党指導層の方針を無視した提起であり、党総務は彼への議會招集を停止してしまつたことさえある。七三年△死に体▽となつたグラドストンが△特攻的▽試みとして、アイルランドの大学の改革案を提案し、破れた。この時フォウセツトは提案を痛烈に批判し彼を追いつめたの

である。他方フォウセツト提案の宗教審査廃止案は議會を通る。彼の「生涯の絶頂」であつた。⁽¹²⁸⁾

グラドストンの第一次政権を最も成功した政府とみるのが普通である。社会、宗教、政治の争点総てに亘つて立法化を進め、一九世紀中比肩するものない一連の重要な改革をつみ重ねた政府だといふのである。ところがフォウセツトは六八―七四年の自由党政府をこのようにはみない。これにあいつぐ時期イギリス政治の左翼に一般的となる立場をとる彼にとつて、自分の政党の政府は機会を失し、生半可な政策をとり、その足跡は失敗の業績目録であつて、しばしば自由主義の原理に反するといふのである。⁽¹²⁹⁾

フォウセツトはグラドストンの第二次内閣でそれほど重要ではない郵政長官の地位につく。政府内にとり込んで彼の反対を封ずるためでもあつたらう。レッセフェールの原則に反して彼は少なからず郵便事業で業績をあげたが、結局はグラドストンの政府にとり込まれてしまったといわざるをえない。彼自身もそう感じていたように、彼の本領は平議員でいることであつたらう。

急進派知識人にも様々のタイプがあり、学究的な人達もいれば、ノンコンフォーミストの者もいる。また△実証主義者▽という変つた人達もいた。こうした知識人達は急進主義的な議員となり、また労働者のスポークスマンともなつた。ノンコンフォーミストについて述べる前に、イギリスの実証主義者、及び△自由思想家▽といわれる人達を紹介することにする。

六〇年代初期、中産階級急進主義の辿つた道で最も興味深いのは、自由主義的な学究サークルの中で、イギリス実証主義が生まれたことである。ミルも六五年フランスの実証哲学者コントを中心に、二つの論説をウエストミンスター評論に発表した。⁽¹³⁰⁾ 実証主義者はフランスの思想家コントの流れをくむ知識人を中核とする。イギリスではオックスフォードのウォダム・コレッジのR・コングリーヴ(一八一九九)が源流であり、E・S・ピーズリー(三一―一五)とF・ハリソン(三一―二三)がこのグループの代表的人物である。ほかではJ・H・ブリジスも重要であるが、J・モーレ

イ(三八―二三)も、ハリソンと分れる——七五年頃——までは実証主義者であった。⁽¹³²⁾ 彼らはコントに従い、神なき宗教を信条とする。尊崇と献身の対象は「過去、現在、未来を包含して、一つの連続的全体をなすとみられる人類」である。人は「人類」を愛し「人類」に奉仕しなければならない。コントがこの人類のために人々に求めるのは人類への「利他的な」無限の献身である。そこでは何よりも人類の「統合」が求められる。彼を高く評価するミルが批判するのはこの点である。⁽¹³³⁾ ミルはコントの人類教において「祭式」*rites*に微細な規則が設けられているのを強制的であり、また滑稽であるとした。⁽¹³⁴⁾ コントは科学と哲学を余りに宗教に変造してしまったというのである。

コントに従うイギリスの実証主義者も実証的科学に依拠しようとし、通常の意味の宗教を拒否する。それは「知りえないもの」についての信仰であり、それを「神」として崇めるにすぎない。しかし

知りえないものを認め、それに信をおき、われわれに対する影響力を感じとり、それに感謝を捧げ、人生をそれに適合させ、それを援けを求める、などという言葉を用いることはノンセンスである。われわれは、子供が「またたく星」に驚異を感じるごとく、それに驚異を感じる。それだけのことである。⁽¹³⁵⁾

ハリソンによれば、知識とは「総て知りうるものの領域の内に」ある。

われわれの道徳科学・社会科学はもちろん知識の領域内にある。道徳的社会的福祉、道徳・社会教育、進歩、完成は当然道徳・社会科学に依存する。文明は道徳・社会の進歩に依存する。そして幸福は双方により保障されるだけである。しかし宗教が知られずまた知りえないものの領域にあるとすれば、それは知られるものこれら総ての領域外にある。換言すれば、宗教は当然知識、文明、社会的規律、道徳、進歩、幸福の領域の外にある。⁽¹³⁶⁾

眞の「宗教」は「知りうるもの」の領域内に求められなければならない。

イギリスの実証主義者も人類を価値観の中枢に据える。この人類についての意識を引上げるために、精神的活動を活

発にさせ、現在以上に社会的良心を深化させるよう努める。そのためには一定の精神的な權威をして人々の信条を規制し、変革させねばならない。それは「思考し、認識し、信じ、説得し、鼓舞する愛情と熱情」を支配する⁽¹³⁷⁾。しかし彼らは、実証主義を神秘化してしまつたことでミルがコントを批判したように、コントが主張した精神的權威の一元的統合に反対し、思想と宗教の自由を力説する。コントと違い、精神的權威と世俗的権力を明確に分離しようというのが彼らの根本的社會思想である。富裕で有力な人々の束縛から精神の次元を引離すべきだと考えるからである。こうした人々はどうにもならない物質主義と、宗教をば単に社会的統制の道具としてしかみず、人類大衆の諸条件をひき上げようと努める精神的權威の努力を妨げてしまふ。精神的權威というものは國家權力から分離され、精神の深みにおいて貧しい人々に訴へることによつて努力の実をあげることができると、というのが彼らの信条である。彼らにとつて、ウィッグの意味での \wedge 「道徳性」 \vee は何の意味もなく、有害無益である。國教會に閉じこめられる宗教と道徳とは、人々の精神の深みにも、また普遍的な人類の愛にも至るものではない。重要なのは「同胞愛」であり、眞の宗教は人類にある。こうして非國教化は彼らの基本政策となる。七〇年代初め政治の重要争点となる公的學校教育の問題において、彼らは基本的に世俗教育の立場をとる。それぞれの宗派による宗教教育が認められるなら、同時にまた、宗教教育もよしともされるが⁽¹³⁸⁾（モーレイ）。

実証主義者が、ウィッグや自由主義知識人と異なる重要な特徴は、彼らと違い、民衆を信じ、民衆の判断力や情熱に信をおくということにある。他面からいえば、教養ある人達の權威に不信感をもつということである。モーレイは、政府というものが階級的な偏りがなく、「マジヨリテイの利益に対し完全で揺るぎなき配慮」に基づくようになればなるほど道徳的で眞のものとなるという。教養ある人々は「他の階級の利益」⁽¹³⁹⁾について安全に任せられるものではない。民衆を除けば、どんな階級といえども、すぐに「反社会的」となつてしまふ。実証主義者が自由貿易を認めるのも労働

階級の生活水準の維持のための最善の保障となるがゆえにである。ハリソンはパリ・コミューンの中にさえ高く評価すべきものが多いとし、労働階級のリーダー達の開明性と実際性に着目した⁽¹⁴⁰⁾。実際、実証主義者は労働階級、少なくとも労働階級エリートの一部には無視しえない影響、少なくとも無視しえない関係をもった。六七年設置の労働組合問題を検討する王立委員会の委員となったハリソンは「少数意見」の側であった⁽¹⁴¹⁾。労働階級(エリート)によく読まれた『蜂の巣』紙に、ピーズリーとハリソンはよく寄稿したし、モーレイが編集する『フォートナイト評論』は労働階級の中でかなり読まれていたと思われる。七三年にはミルやハリソンの弟子であった彼は、チェンバレンを「明確にイギリス進歩党の指導者」であると明言し⁽¹⁴²⁾、決定的にデモクラットとなった。

とはいえ実証主義者の影響はごく限られたものであった。ミルはコント達の神のいない宗教(人類教)についてこう⁽¹⁴³⁾いっている。

コント氏の宗教とは神なき宗教である。しかしこういえば、読者のうちの一〇分の九の人々、少なくともイギリスの読者のうち一〇分の九の人々は、顔をそむけ、耳をおおうに違いない。信仰をもたないことは確かに醜聞に値することである。しかしこのことに彼らは驚かない。だが、神に対する信仰なしに宗教について語ることは、これらの人々には荒唐無稽であるばかりか、冒瀆的なことともなる。(また残りの一〇分の一の人々の大部分はおそらくいやしくも宗教と自称するものにはどのようなものであろうと、背を向けよう)

実証主義は特定の地域、特に西ライディングなどでは、労働者の中でもかなり広い影響をもったが、それも限られたものであった。このことは▲民衆の自由思想家▼Free thinker についてもいえる。▲世俗主義▼の動きは既に五〇年代にあったが、それが活発となったのは様々の急進主義的運動が活発化した六〇年代半ば以後である。それを示すのは、それまで各地にあった地方の世俗主義者グループがブラドローにより全国世俗協会 National Secular Society として全国的グループに統一されたことである。当初協会に加わった人々には、かつてチャーチストであった者も少なくないが、

オーウェン主義者が多く、選挙法改革連盟の運動にたずさわった人達が主体をなした。協会の目的は、「人類の改善と幸福は市民的・宗教的自由なしには有効に進められないこと、したがって、政治的・宗教的問題において、総ての人々にとり思想と表現の平等な自由への障害をすべて積極的に攻撃することは：総ての個人の義務である」とされる。⁽¹⁴⁷⁾七〇年前後協会は勢力を拡大するが、ブラドロー達が共和国主義運動にエネルギーをさいたため、七四年頃までに衰退した。その後七〇年代末から勢力を盛り返し、八〇年代初めその絶頂に達する。八〇年選挙の時はブラドローは下院議員に選ばれさえした。⁽¹⁴⁹⁾この「無神論者」を議員として認めるべきか否かは議会で大論争となった。ブラドロー事件)。

協会員にどういふタイプの者が多いかは確かめるのがむずかしい。当時の人の見方では、世俗主義運動に加わった者には労働階級の者が多いということでは一致していた。⁽¹⁵⁰⁾熟練労働者が多く住み、商店主が多く、以前から急進主義者が多くいるロンドンのフィンズベリー地区に彼らが多いことから、こうした印象が強められたのかもしれない。「自由思想は労働階級のエリートをひきつけた」(八八年『自由思想家』誌)ともいわれる。⁽¹⁵¹⁾「リスベクタブルな労働者」が多いたったことは否定できないであろう。しかしロイル教授によれば、世俗主義者には様々のタイプの人々がいる。半・非熟練労働者は「比較的」に少なく(二五%)、これに対し熟練労働者は多い(二二・七%)が、自営業者はさらに多い(三二%)。ホワイトカラー層もかなりいる(二五・五%)し、専門職さえいる(三・一%)。「短い死亡記事からうける印象では、独立的な思想で、概して独学であつて、がちがちの、議論好きな、時としてイタセントリックな人間」が多い。会員数も正式の発表がないのでわからず、推量するしかない。会費(年一シリング)から計算したある者は、八四一五年一八、三二七名で、これに会費を払えない貧しい者六、〇〇〇名を加えうるとしているが、⁽¹⁵⁴⁾会費をより多く払っているものが少なからずいると思われるから、これより少なからう。指導層の一人アニー・ペザントは八〇年第一回国際大会の際六、〇〇〇名と報告しているが、これさえも多めではないかと思われる。⁽¹⁵⁵⁾ロイル教授はいふ。「自

自由思想のメンバーのどの調査においても、話しの誇大化という歴史上よくある例は、

あちこちと渡り歩き、貧弱な材料で大きな見世物をつくらうとする一にぎりの騒々しい世俗主義者にも妥当する。世俗主義者はこのことを自身認め、当代の頑迷さと、布教での利便を教会に与えている不公平をいいたてて慰めをみ出し、民衆の信心を支えているかの聖書を痛撃しようとの努力を倍加したのであった。⁽¹⁶⁾

自由思想家は———そう意識しなかったであろうが———教会がなしているのと同じ戦、民衆の無関心との戦をしているのである。彼らは宗教復興主義者が大衆の悪事の手助けをするとして批判した。クリスチャンの方は彼らの粗野な技巧を嘆くが。しかし「明らかなことは、教会の方が自由思想の諸集団より支持者をひきつけるのにはるかによく成功していたということであった」。⁽¹⁶⁾

▲世俗主義▼の自由思想は教会に比べて、支持者をひきつける力ではるかに及ばない。労働階級の急進主義者も多くは宗教的背景、特にノンコンフォーミストの背景をもっていた。『蜂の巣』の創始者で編集者のG・ポッターは組合教会派であったし、農業労働者組合の創設者J・アーチは原始メソジストであったし、労働者代表同盟の書記H・ブロードストと、TUC議会議委員会の書記G・ハウエルはウエズレイ派であったし、若きヘンダーソンはウエズレイ派、K・ハーディは福音主義ユニオン教会と関係していた。自由主義の——急進主義のでさえ——知識人には(グリーンなどもその一人である)、福音主義の背景をもち、この背景からでてくる神学的概念に滲透されていたように労働階級の急進主義者にはノンコンフォーミストの背景をもち、その信条に滲透されていた者が多かったのである。

急進派知識人は急進派の中では重要な位置を占めたし、そればかりか自由党の中においてさえ、彼らは独特の位置を占め、その動きは無視されるべくもない。とはいえ、彼らが自由党の主流であったとはとてもいえないし、急進派の中においてさえ、その一角を占めるにすぎない。支持者のレベルでは問題にならない。自由党に投票する有権者を見ると——急進派を支持する国教徒や世俗主義者と比べて——ノンコンフォォーミストが占める割合は極めて大きい。▲熱心な信者▽をみると、ノンコンフォォーミストの人数は国教徒の人数に比べ——有権者の割合はノンコンフォォーミストの中での方が国教徒の中でよりも小さいとみたとしても——それほど違うわけではなく、しかもノンコンフォォーミストの中の自由党支持は圧倒的なのである。国教徒の中では、自由党支持者（多くはウィッグ支持であろう）は保守党支持者に比べ、その四分の一から三分の一少々とみられるが、ノンコンフォォーミストでは正確な計算はまだ存在しないといえ、その八、九割が自由党支持者であると考えられる。⁽²⁾ 実際、組合教会派についていえば、保守党支持などとは言語矛盾だとさえいわれるのである。⁽³⁾ 指導者のレベルをとつても、ノンコンフォォーミストの勢力は極めて大きい。少なくとも議員のレベルではそうである。パリ教授の算出法によれば、——宗教的観点からの立場の規定がなされているといえ——⁽⁴⁾ 六八—七四年議会で議員であった者で、採決での投票がかなりよく確かめられる自由党議員（四二四名）のうち、急進派といえる者は一一五名である。このうちノンコンフォォーミストでない者は六五名である。⁽⁵⁾ これに対しノンコンフォォーミストの急進派は五〇名である。⁽⁶⁾（急進派ではないノンコンフォォーミスト一二名を加えると、ノンコンフォォーミスト議員は六二名となる）。ノンコンフォォーミストでない急進派の方が多いが（六五年選挙以来知識層が増えたのである）、それでもかなり多い。五二年選挙ではノンコンフォォーミスト議員は三八名であるから、人数は増えてもいるの

である。⁽⁷⁾

このようにノンコンフォーマリスト議員はかなりいたし、そればかりではない。ノンコンフォーマリストの有権者は非常に多いのであるから、ノンコンフォーマリストでない議員（候補者）も、議会での行動には少なくとも選挙区のノンコンフォーマリストの影響や圧力を色濃く反映させざるをえない。自分は「ノンコンフォーマリスト大衆の代表者」だから、そう採決で投票すると表明する議員は少なからずいた。スコットランド（国）教会の急進派であり、やがて自由党の領袖となるキャンベル・バナマンも、ノンコンフォーマリストからの指示を当然のことと考えていた。⁽⁹⁾ 禁酒立法でノンコンフォーマリストが議員候補者いかに強い圧力を加えたかは後に述べる。⁽¹⁰⁾ こうすると、ノンコンフォーマリストが自由党において占める比重は極めて大きい。有権者のレベルでは特にそうだし、議員のレベル（採決）においてもこれが強く反映される。ヴィクトリア朝中・後期の社会や政治において急進主義的知識層や世俗主義が圧倒的であったとはとうてい難い。そうしたものにさえ（福音主義的）宗教性が色濃く滲透している。

ヴィクトリア時代の都市の古典的研究の中でブリグスはこういつている。自主的にせよ町の仕事にせよ、

教会建築に向けて多大の努力がなされた。これは都市環境における宗教の将来におけるヴィクトリア人の関心を反映する。しかし特に女王治世の最後の二五年間には公共の建物、病院、学校、下水処理場、水道施設の巨大な発展があった。⁽¹¹⁾

ヴィクトリア時代宗教への多大の関心があったという。だが、それだけではなく、様々の公共施設の建設の努力の背後にも宗教的信条の支えがあったはずである。

現在、一九世紀、いわば産業—都市化の時代に、世俗化が進んだという伝統的立場は挑戦をうけつつある。⁽¹²⁾ 一九世紀中むしろ宗教的熱情が広まり強化されたという証拠も提出されている。そしてこの広まりと強化は特にデイセンターの拡大に典型的に現れたとされているのである。最近の宗教—教会史研究をみてみよう。

最近の成果で最少限いえることは、次のとおりであるという。⁽¹³⁾ (1) 〘宗教の衰退〙のイメージは、一七五〇年頃から一八八〇年頃までの間、及びおそらく二〇世紀初めの一〇年間までの間のイギリスについての証拠と合わないと思われつつある。(2) 一八世紀末あるいは一九世紀初め、即ち産業革命期以前の時期と断絶して、宗教の衰退が急激に始まり、二〇世紀前半に急速に加速化されるに至るといふ急速な宗教の衰退のイメージに対し、はるかに緩慢な変化のイメージが代りつつある。(3) ある時点——産業革命初期、後期ヴィクトリア・エドワード時代、あるいは戦間・戦後期——に労働階級が教会から膨大な数去ってしまったというイメージは、二〇世紀、教会に行く人口中労働階級の分がごくわずくしか減っていないという証拠によって覆えられている。また、現在までの研究からして、最大限いえることとしては次の三つのことがあるという。(1) 一九世紀の過程で、また一八三〇年代から一八八〇年代までは確実に（恐らくは一九一〇年代まで）、正式の教会所属には極めて顕著な成長があり、ついで生じた所属員の減少は一九五〇年代まで緩やかであった。(2) 産業革命初期から一八八〇年代まで、一人当り教会に行く頻度は増加した。(3) イギリスの労働階級が一九世紀中増加するに従い、宗教は彼らの文化や価値観において主要な要素となり、この形は少なくとも二〇世紀半ばまで同じように高度に持続した。こうすると、われわれが扱う一九世紀半ば過ぎ宗教信条——感情はきわめて盛んであったということが出来る。都市の中産階級地区においては、一九世紀中教会に行かないことにはかなりの勇気がいったとされているのである。⁽¹⁴⁾

既に述べたように、五、六〇年代キリスト教信仰に対する知的挑戦が活発になったことは確かであるが、それを直ちに世俗化と結びつけることはできない。キリスト教信仰と教会があらゆるさまに攻撃をうける時、しばしば反作用のバネが働き、〘教会の危機〙が叫ばれ、挑戦に対し宗教心が再活性化される。ノンコンフォーマーミストが勢力を伸ばした時もそうであり、国教会側は防衛の姿勢を強化した。この姿勢の反作用は、国教会の福音主義者や広教会派やまた高教会派

など、宗派間相互でもみられる。高教会派のごときは、トラクト主義の影響により、以前からの在り方を去り、儀式主義リキヤリスムの傾向をさらに強めさえした。カトリックの儀式の一般的な採用、信仰告白の慣行、僧・尼僧院の創設である。マチン教授によれば、この儀式主義は六〇年代から盛んになり——一九三〇年代に至るまで——宗教・政界で主要な争点となった。この儀式主義がまた、それを推進しようとする高教会派と、それに反対する諸宗派の動きを活発にした。反感を一層強めたのはローマ教皇の教皇至上主義への傾斜である。アイルランドのシンフェイン党の過激化も同様である。高教会派は自派が教主主義者と違うことを力説したし、また派の人々総てが現に儀式主義者であるわけでもなかったが、儀式主義への共感があった。少数派である彼らは国家による教会の統制に反撥し、非国教化を説く傾向さえ出現した。ノンコンフォーミストは福音主義的であるから、当然儀式主義を嫌う。が同時に、儀式主義の台頭が国教会側の陣営を弱めもし、非国教化の立場の強化に役立つとみ、その限りでその台頭を歓迎さえした。こうした宗派間の複雑な対立と協調の関係は宗派感情や宗教心そのものさえ——少なくとも一時的には——強めたであろうし、これは政治にも現われてくる。

非国教化、教育、儀式主義の諸問題は、ローマ・カトリック主義や教会改革の問題と結びつき、この時期（一六〇年代から一九二〇年代まで）の主要な教会抗争をなした。他の展開——世俗化、政党の変化、社会改革についてのいや増す関心の集中——もこの抗争をさまたげなかった。やがて抗争は激しさを大いに弱めてゆくが⁽¹⁷⁾。

別の機会に、政治の世界の中で、非国教化と教育の問題の進展をみてゆくが、これはこの時期の強い宗教・宗派心を前提にせずには理解できまい。その中でもノンコンフォーミストは重要である。六七七年以後の自由党には、二つの陣営、一方には大部分のウィッグが、他方にはグラドストーン派、大部分のノンコンフォーミスト、急進派が区別でき、ノンコンフォーミストが後者の大衆的基盤を提供したのである。

ノンコンフォーミストの人数は一九世紀中増え続けた。⁽¹⁸⁾一九〇〇年までにイングランドとウエールズで主要なノンコンフォーミスト教会に所属するメンバーの人数は一七六万人余りいたのであり、これは同年のイースターの折の国教徒の礼拝者二〇〇万人少々と比べると、驚くべき人数である。⁽¹⁹⁾(国教徒の礼拝者数は一年で最も多い日の一つのものであり、これに対してノンコンフォーミストの方は礼拝者ではなく、△メンパー▽であつて、礼拝者数をとれば、さらにかなり多くなるはずである)。積極的なノンコンフォーミストの人数は積極的な国教徒より多いに違いない。ただ、人口比にすれば、ノンコンフォーミストの割合は小さくはなつていよう。大ざっぱにいつて、ノンコンフォーミストの人口比は一九世紀前半に大きくなつていたが、世紀後半の半期ほどは横ばいであり、その後は少なくなつたと思われる。それでも人数をみる限りノンコンフォーミストは増え続け、ピークは一九〇六年の二〇〇万である。その後は減り続ける。⁽²⁰⁾

一八五一年の国勢調査(宗教に関する唯一の全調査である)によると、ノンコンフォーミストは全国到る所に散らばつてゐるが、産業地帯では特に多い。主要な産業地帯の都市二九のうち、二〇の都市で、ノンコンフォーミストの教会にいく者の方が国教会に行く者よりも多い。とりわけウエズレイ派はそうである。⁽²¹⁾五一年の国勢調査によれば、教会によく行く信者をとつてみると、ブラッドフォード、リーズ、オルダム、ウルヴァハンプトン、シェフィールドでは、ノンコンフォーミストが半分以上を占める。バーミンガム、マンチェスター、ソルフフォード、ニューカースルでは四〇—五〇%である。カトリックを計算にいとると、主要な産業都市では、国教徒はマイノリティとなる。

これらの都市での有力者をみてもノンコンフォーミストが多い(都市内政治については節を改め述べる)。マンチェスターは、反穀物法同盟の中心地であつたとともに、ノンコンフォーミズムの中心地でもあつた。三八年自治都市となつて以来二〇年ほどでディセンターの自由主義者は少数派から優位政党にのし上つた。自治都市になつて最初の市長は、市最大の商家でありユニタリアンのポッターで、息子も三度市長に選ばれ、五一年にはナイトに叙せられた。市の商工

会議所の議長ターナーも、マンチエスター・ガーディアン紙のガーネットやテイラーもユニタリアンであった。これら有力者は反穀物法同盟の過激さを嫌い、その支持者とはならなかったが（彼らは商業会議所からいつ時分れる）、メソジストを別にし、組合教会派、洗礼派、一部のユニタリアンなど、ノンコンフォーミストは熱烈な同盟派となった。⁽²³⁾ 穀物法廃止運動が以前と違い、商工業者の私的な経済的利益の立場でなく——実際彼らはそれ以前にはこのために保護主義を支持していた——道徳的立場が強くおしだされるようになったのは、ノンコンフォーミストの支持が強化されたからに外ならない。⁽²⁴⁾ 少数の地主寡頭制による特権的な階級立法の不正に対する攻撃と、 \wedge パンへの税金 \vee という利己主義的圧政に苦しむ労働階級の惨状が（四一年以後）おし出されるようになったのである。⁽²⁵⁾ 同盟への支持が拡大したのも、商工業の利益の観点以上により広い原理的立場が力説されるようになったからであろう。穀物法撤廃運動がカトリックのメイヌート校助成反対運動と重なり、ノンコンフォーミストの動きが一層広がり、撤廃運動は一層加速されたといえる。⁽²⁶⁾ コペンハーゲンは「国中のどの党派よりも」ノンコンフォーミストが頼りになるといつている。「ノンコンフォーミティは同盟やその後継者何れもの背後の強力な勢力であった」。⁽²⁷⁾

バーミンガムにおいてもノンコンフォーミストは町で有力であった。バーミンガムは教会税を最も早く（三一年）徹廃した町である。彼らは町の有力層をなす。彼らのインパクトは「市で最も尊敬をうけた家族達の威信——それに富——が地方のデイセントの背後にある原動力であるという事実によって強化された。実業家達はまた国教会に移ったり宗教から離れたりしようという心理的圧力に従わず、ノンコンフォーミスト会衆の財政や仕事に貢献した」。⁽²⁸⁾ デイルはバーミンガムが大きな村だといったことがある。市の重要な決定は、互いに知り合い、姻戚関係で結ばれた核となる少数のノンコンフォーミストの家族たちによってなされた。⁽²⁹⁾

リーズは一七世紀以来の自治都市であり、また近辺の有力な貴族（フィッツウィリアム伯家）の強いインフレンスの

及ぶ都市であるという点で、単なる商工業都市とは異なる。それでも商工業都市としての性格をもち、ノンコンフォミストの勢力が強く、自由党内でもウィッグに比して急進派が勢力を増しつつあった。⁽³⁰⁾三五年再編されて新たに作られた市憲章の下、最初に市長になったのは、洗礼派の羊毛業者G・グッドマンであり、二代目市長もノンコンフォミストのウイリアムソン博士である。以来一〇年あまりに亘り（任期は一年）、国教徒の市長は一人しかない。洗礼派一人、独立派一人、カトリック一人、ウエズレイ派三人、ユニタリアン五人である。有力な新聞リーズ・マーキュリ紙のペインズは組合教会派であり、全国政治でも活躍した。市議会も四〇年代初めのいつとき保守党議員が優位になっただけで、七〇年代末まで殆んどで自由党が優位する自由党優位体制であった。⁽³¹⁾

リーズ近辺のブラッドフォードでもノンコンフォミストは強い。信者数でいえば、その割合は半分をこえた。リーズと競争意識が強いこの町は、リーズと違い、産業都市として形成された。それでも、リーズと同様、周辺には有力なトーリーのアリストクラシー（ジェントリ）があり、旧来の町の有力者は彼らと結びついて町を牛耳り、産業家達は既得権益を守ろうとする支配層と争わねばならなかった。この争いの焦点となった問題が町を自治都市にするか否かの争点であり、この問題をめぐり町は二分されたのである。この時町を自治都市にし、旧体制を改めようとした主力がディセンターの勢力であった。近辺のジェントリ（多くはトーリー）と結んだ町のイスタブリッシュメント（多くは国教徒）⁽³²⁾に対し、多くはディセンターである中産階級の新人達が反逆したのである。三五年に制定された新自治体法は、新たに自治体となる町に、より広い範囲の有権者によって選出される市議会を認め、閉鎖的であった町の政治・行政に対する新人の反逆を有利に展開させえたのである。結局ブラッドフォードは四七年自治都市となることができた。

自治都市にするか否かでブラッドフォードで起った争いは、この争いの古典的な例であった。一八世紀半ば以来、多くがトーリーであるバラの中産階級支配層が近辺の、多くはトーリーのアリストクラシーと結んで△閉鎖的▽にバラを

支配する、これが一般的パタンとなった。この支配層に対し、産業革命の結果有力となった新人の、多くは中産階級の
 デイセンターが中心になりこれに挑戦したのである。⁽³⁴⁾自治都市化はこの挑戦の端的な現れである。マンチェスターでも
 同様であつたし、⁽³⁵⁾リーズでも新自治体法をうけて、バラの改組が行われた。こうして市長職にも、市議会にもデイセン
 ターが入つてゆく。デイセンターの運動のリーダーの多くはそれぞれの地域での社会的リーダーの役割を果たそうとし
 たのである。▲成り上り▼の野心をもつてであるとしてもである。だがその正当化もあつた。パーミンガムの組合教会
 派牧師デイルは⁽³⁶⁾いう。

キリスト者は、悪に善がうち勝つよう、ここでその役割を担わねばならない。投票所で、演壇で、議会で、町の議会で、救貧保護委員
 会で、キリストに仕えることができよう。

マンチェスターのヘイウッドにせよ、リーズのペインズにせよ、パーミンガムのスタージにせよ、都市政治によつて、
 デイセンター陣営を支えようとしたのである。

パーミンカムは中小の工場の多い産業都市である。他方、マンチェスターやリーズ(マーシャル家)は大工場がある
 が、それぞれの地方の中心都市であり、多様な職業が混在する商工業都市である。マンチェスターはこの点、近辺の産
 業都市でも、▲単一▼産業、というより▲単一▼製造業の町であり、少数の工場主が町を支配するオールダム、グロソ
 ップ、ストックポートなどとは異なる。⁽³⁶⁾単一、ないし少数産業が支配するデイセンターの町としてミドルズブラをみて
 おく。

ミドルズブラは一九世紀初めには四軒の家しかない北東海岸辺りの塩沼の周りの寒村であつた。これが三〇、四〇年
 代から急速に膨張し、五三年には自治都市になった。文字通り町を創つたのは一団のクエーカーであり、中心はピーズ
 家である(当主はブライトとも関係をもつた)。石炭の採掘、積出しから始り、やがて製造業が起り、経済的に膨張する。

この過程で、 \wedge みごと \vee なまでに経済の中心がピース一家に集中するが、それだけではなく、一家は都市計画を作り、教会や学校を建て、町の社会・政治生活の中心となった。当主はいくつかの称号も獲得した。町には外国からも含めて移住民が多く、新産業（鉄鋼業）は彼らによっても促進された。国教徒でない者が多いのもこのためである。⁽³⁷⁾

なおリヴァプールについて一言述べておく。ここにはアイルランドからの移住者が多く、彼らは殆どカトリックであり、自由党との結びつきがある。このため、これに反発する人々が多く、彼らは保守党に傾斜する。ランカシャーの商業都市でありながら、ディセスターが優位に立ちえず、保守党優位の体制が持続したのはこのためであった。⁽³⁸⁾

北部産業地帯でノンコンフォームリストは非常に多く、国教徒の人数に劣らないとはいえ、国教徒と比べて最も割合が小さい州（シュロップシャー）においても二八%あり、全国到る所に散らばっていたといつてよからう。⁽³⁹⁾ またノンコンフォームリストは都市で強く、農村で弱いというパターンは単純には成立せず、「むしろ、ノンコンフォームティは国教会の及ばない空隙を満した、というパターンである」⁽⁴⁰⁾。一九世紀初期の人口の爆発的増加時、郷紳と国教会牧師の力が弱かった所に広がったということが出来る。それは何人もの地主がおり、一人の地主に土地が集中していない所、教区の境界にある居住地、市場町、それも衰退している所、新しい産業的な村落、大きな教区、郷紳や国教会牧師のいない所などである。⁽⁴¹⁾ そうした所は北部と西部に多く、したがってそこではノンコンフォームリストは東部や南部でよりも多い。またウエールズの場合は特徴的であり、（ケルト）民族主義的感情から国教会に対する反発が強く、ノンコンフォームが強い。とはいえ、ノンコンフォームリストは全国的に散らばっているという概括は否定すべくもない。

一七五〇年から一八五〇年にかけて新しい村落居住地は、宗教的熱情と関心に満ち、それはいやましていたという。「紡績工場とか、大規模な漂白や染物工場とか炭坑とか、大きな石切場とかが地方に作られる場合、そこにはしばしば福音を伝える機会」、宗教的熱情、「説教や指導への希求」の報告が溢れていた。⁽⁴²⁾ 産業革命初期におけるこうした「産業

的村落⁽⁴³⁾」での宗教の状態は——都市社会での世俗化を主張するホップスバウムなどの歴史家によってさえ⁽⁴⁴⁾——大部分の歴史家によって認められているところである。⁽⁴⁵⁾ 当時の情熱的な宗教性はただ何れの形態をとるか——カトリック、プロテスタントか何れかさえ——わからない。▲星雲▼の状態であつて、どのように働きかけるかによって多分に左右されるようなものであつたと考えられる。ところが、こうした状態にある産業的村落に国教会は容易に手がまわらず、住民の宗教的要求に答えられなかつた。ここにデイセンターがくい込み、勢力を伸ばす余地がでてくる。現にそうなのである。こうなると、国教会を基盤に維持されてきた統一的な宗教的秩序に分れ目が入つてき、様々の宗派が分立し、宗教の側面のみならず、やがて社会が▲断片化▼する。それぞれの宗派の境界がそれぞれの断片を囲い、保護する。階級分離・対立が生まれるのもその一側面である(国教会に収める十分の一税の廃止運動がその典型⁽⁴⁶⁾)。

こうした対立抗争の中の産業的村落は——ブラウン教授によれば⁽⁴⁷⁾——「資本主義社会においてその地位を支える新しい価値観を生ぜしめる」という。「リスベクタピリティ、ハードワークのエトス、節酒、節制、儉約、慎重」などがそれである。デイセンターの教会は国教会から独立に信者自身が——雇用主の援助があるとはいえ——作り、維持するのであつて、ここに「教会の共和国」の意義があり、それが個人の独立性と個人主義を促進させるというのである。教授のこの主張はさらに証明の必要があるう。

何れにせよ多くの歴史家によって認められた「産業的村落」の宗教性の意味は重要であろう。それはデイセンターが都市のみでなく、村落にも多い理由を説明する材料となろう(「産業的村落」がそのまま都市へと発展しない場合がありある)。ブラウン教授によれば、さらに、そこで「新しい価値観」が生れ、個人の独立性と個人主義が生まれたのである。さらにまた、教授の主張によれば、一九世紀急激に膨張する都市は、地方からの移入者の激増によって膨張したのであるから、「田園から田舎の慣習と宗教がもち込まれる移住者の都市⁽⁴⁸⁾」となつた。都市に田舎的仕きたりや祭り

があるのもこのためであるといふ⁽⁴⁹⁾。実際一九世紀には都市で田舎から連れてきた牛や豚を飼う者が少なからずいた。ところで都市への移住者には「産業的村落」からの人々も多かったに違いない。したがってデイセントの宗教ももち込まれよう。そればかりか、急激に膨張する都市には国教会は対応し切れず、こうしたデイセンター達が自分達の宗教を広げる教会の空白が大きい⁽⁵⁰⁾。北部産業都市にデイセンターが多い理由である。

多くの歴史家によれば、都市での教会建設が進み、移住者が宗教的に定着するのは一九世紀半ば以後である。同様に彼らは都市の中に同化してゆくのである。「この時期、従来から市民の中で貧しく社会的軽蔑のまなざしてみられていた移住者のあるグループは、教会での同化とともに、経済的文化的に急速に同化の流れに沿った⁽⁵¹⁾。こうした都市環境のもと「宗教的ブームの時代」がくる。それは北部産業地帯、シェフィールドやハリファックスでみられたし、オールダムやランカシャーの紡績業の町の研究によって確められている⁽⁵²⁾。さらには南部のロンドン地区、レディング、ランベス、クロイドンでも——一九世紀最後の一〇ないし二〇年まで——研究で示唆されている⁽⁵⁴⁾。

一九世紀の都市は多分に田舎的要素を並存させ、田舎者が△自由に▽入り込める所であった。教会もそうである。ところが、世紀の代り目頃から△都会文化▽が固まり、△都会人▽と新たな移住者の間のカルチュラルなギャップがでてくる。新中産階級の拡大と郊外住宅地の膨張もこの頃である。⁽⁵⁶⁾△都会人▽の宗教性——世俗性の問題が深刻になるのもこの頃からである。それは宗教的情熱と広がりやの衰退でもあった。

ここでデイセンターの各派をみておこう。

一八世紀デイセンターが弱体化する中で、最も早くから活動的に動いたのはユニタリアンであった⁽⁵⁷⁾。ユニタリアンは、一七世紀のプレスピタリアンの流れをくみ、一八世紀四〇年代からの信仰復活運動から生まれた潮流に反対で、最も進

歩的な思想をもち、最初は啓蒙思想の流れに、ついでロマン主義の流れに合流した。三位一体説をとらず、非合法的宗派であり、宗教寛容法が彼らにも広げられ、合法化されたのは一八一三年になってからである。彼らは福音主義的ではなく、また罪の意識や改悛の意識により深く悩まされることもない。産業革命の典型的な都市であるマンチェスターには有力なユニタリアン社会があり、それは北部産業地帯の同社会のモデルであった⁽⁵⁸⁾。三〇年代の改革期ユニタリアンは活発に動いたが、民衆と離れ、一九世紀中数的に弱体化する⁽⁵⁹⁾。

クエーカー(友愛教会)は一八世紀に広がった。福音主義以前の神秘的な宗教をもつが、福音主義のエトスを吸収した⁽⁶⁰⁾(それは一八三〇年代分派ができる原因ともなった)。宗教教育は極端に貧弱な状態にあった(一八六〇年まで会合での聖書の音読は許されなかった)。日曜学校も一八四〇年代まではなかった。集団として緊密に結ばれ、他宗派と離れており、他宗派との婚姻は許されない。ブライトの弟と姉妹はこのため宗派から追放されてしまった⁽⁶¹⁾。六〇年代にはこの定めも緩むが⁽⁶²⁾、衰勢にあったクエーカーが盛りかえすのはこの頃からである。宗教教育の改善と福音主義の積極的評価があったのである。

メソジストは一八世紀福音主義の復活から生れ、その半ば頃から一九世紀三〇年代まで急速に膨張した。その中のウエズレイ派はJ・ウエズレイの流れを直接ひく。この派は毎年開かれる説教者の大会^{プレチャー}によって厳格に指導され、コントロールされる。国教会に最も近く、ノンコンフォーミストの他派から離れており、ノンコンフォーミストであることを否認さえした。一九世紀前半には——海外での布教活動には熱心であるが——国内では布教よりは内部固めの方向に向った⁽⁶³⁾。原始メソジスト派は一九世紀初頭ウエズレイ派から分れた派であり、「プリミティブ」と呼ぶのは、彼らがメソジストの本元であると考えたからである。派はウエズレイ派大会によって過激すぎるとみる伝道の方法を用いようとする。外にも、一九〇七年統一されて統一メソジスト教会となるまで、三派あり⁽⁶⁴⁾、それらはウエズレイ派よりも俗人と

地方性を重んじた。各派はそれぞれの組織原理をもち、また家代々承継される傾向が強い。とはいえ、メソジストは総てJ・ウエズレイの信仰の熱情とC・ウエズレイの賛美歌をうけ継ぐ。メソジストはノンコンフォードミストのうち最も信仰者数が多い。五一年の国勢調査では教会に行つた者全体の四分の一を占めた。多いのは、ミッドランド南部からリシカンシャーヨークシャーにのびる開放耕作地のベルト地帯、及びコンウォールとワイト島である。この地帯の南東及び北西の地域には少ない。

メソジスト以外の宗派はメソジストよりも古く、一七世紀に国教会から分れた。一九世紀までしばしば△旧デイセント▽と呼ばれた。当初この中で最も人数が多かつたのは長老派プレスビテリアン（全体の三分の一ほど）であつたが、スコットランド（そこでは国教である）を除き、一九世紀には組合教会派コングレガティオンナリスタが最も人数が多くなる。組合教会派は正統的ピューリタンの左派であつて、一九世紀になつてもしばしば独立派インデペンデントと呼ばれた。長老派と独立派の主たる相違は教会統治方式にあり、前者が階層制に基づいていたのに対し、後者は個々の組合に決定的な權威を与える。⁽⁶⁵⁾派を構成する各組合が自からに關係する事からは自から行う権利と義務をもつ、と考へられたのである。一八三〇年から六〇年にかけてルーシな連合ユニオン体から、宗派と呼ばれるにふさわしい組織に変えられ、中央組織をもつようになった。デイセンターの権利を実現し、コレッジの維持や僧職の報酬には、小さい独立的な単位よりも、州レベルの組織の強化が必要であり、さらにそのうえに全国的な集まりが必要とみられるようになったのである。三一年に組合教会連合ユニオンが創られ、三〇、四〇年代各州の組織がこれに加盟していった。その後は独立性とまとまりの間を動揺する。派はカルヴァン主義に忠実であつたが、メソジストに倣い、ミッシヨン活動を行い、日曜学校や村での説教に力をいれるようになった。⁽⁶⁶⁾派はデーヴォンからエセックス、サフォークにかけて強い。ロンドンでは強いが、他の都会ではそれほどでもない。

洗礼派は組合教会派と似ており、△独立派▽コングレガティオンナリスタ会衆教会組織である。ただ意識的にクリスチャンたる者のみが洗礼を

うけるに値すると考えることで組合教会派と異なる。厳格なカルヴァン主義の立場に立ち、教義的にはより保守的であり、また教会の独立性をより強烈に主張する。⁽⁶⁷⁾ 三つの分派があった。⁽⁶⁸⁾ 一九世紀にはまとまる方向に進み、洗礼派連合が創られたが、組合教会派よりもまとめるのがむずかしかった。五一年国勢調査によれば、洗礼に出席した者は三六万二〇〇〇人である。洗礼派は東中部地方から東アングリアにかけて強い。ドーセットとメソジストの強いコンウォールを除き、一九世紀中イングランド南部諸州で伸びたが、北部諸州では西ライディングを除き、弱い。⁽⁶⁹⁾

ノンコンフォーミストの階級をみてみよう。上層階級には殆どいない。一八六九年にはユニタリアンの貴族が三名であつたし、ジェントリーにも極く少ない。因みに、オックスフォード大学ではじめてフェロウになったのは（組合教会派の牧師 R・F・ホートン）一九世紀の末である。⁽⁷⁰⁾ 他方——不思議なことには——極貧の人々の中でもノンコンフォーミストは少ない（教会への拠金も嫌がることはその重要な原因の一つである）⁽⁷²⁾。労働階級のノンコンフォーミストは多くは熟練労働者である。ただ彼らが労働階級内で占める割合はそれほど多くはない（一〇分の一ほど）こうしてまづもつていえることは、ノンコンフォーミストには中産階級の者が圧倒的に多く、中産階級がその主体をなすということである。宗派による階級構成の違いはあれ、このことは宗派いかんをとはない。ヴィクトリア時代都市化が進み、都市生活は中産階級の生活パターンに濃く色どられる。デイセンターはこの中産階級に信者の的を焦つたのである。四八年の組合教会派の大会で、ある者は「われわれの伝導は特に大金持ちや極貧の人々に向けられるのではない。ものをよく考え、行動力があり、力をもつた階級に働きかけるべきだ。宮廷で仕える人々でも田舎屋に住む人々でもなく、都市に集つてきた、様々の地位にある階級の人々こそ現代世界をつくり動かしている人達なのだ」⁽⁷³⁾と述べる。二年後北部洗礼派大会でも、「キリストの教会に大金持ちと極貧の者だけしかいないとすれば、嘆かわしいことだ。神が貧困も富も与えなかつた人々がキリスト教会の大多数となることこそわれわれの望むところだ」⁽⁷⁴⁾とされる。デイセンターが主力を注

いで伝導したのは、都市に集つてき、世界を動かしている様々なタイプの中産階級の人々であった。そして彼らの多くを獲得したのである。

一九世紀後半大衆小説に描かれた筋が自助努力によつて実業に成功し、教養を身につける立身出世の物語りであることは先にみた。「これらの小説において、ピューリタンの精神的自叙伝の伝統との結びつきは明白である」。

主人公は救われ、冒険の後恩寵の状態に達する。都市はプロテスタントの教義を担う構造で組み立てられている。貧しい人々は罪深く墮落しているが、社会は、個人の魂が救済をうるよう保障する精神的責任をもつ。伝統の中心にあるように、精神的道徳的価値の源泉は個人の意識、自己改善の教説、道徳的進歩の中にある。…マンチエスターの貧しい人々についての上からの見方は立身出世と個人の自己修養のよくあるパターンを用いてつくられる。社会的動きは、卑しい貧乏人の境遇から職人のリスベクタビリティへの、伝統の中心においては企業家的資本主義への前進を含む。⁽⁷⁶⁾

卑しい境遇からの立身出世と自己修養の過程はプロテスタントの教義と密接に結びつけられているのである。

階級構成はノンコンフォミストでも宗派により違いがある。これをみたいが、その前に注意すべき点がある。それは、宗派によつて階級構成に違いがあるとはいへ——むしろそれよりも際立つほど——同じ宗派でも個々の教会チャーチによつて大きな違いがあるということである。⁽⁷⁶⁾ 国教会の場合以上に、同じ宗派でも、個々の教会によつて階級が異なり、教会と教会とが離れてしまう。個々の教会は階級いかん、階級の生活習慣いかんに密接に結びついており、教会が宗教・道徳生活の中心であるとともに、いわば重要な——ノンコンフォミスト達には殆ど唯一の——社交生活の中心でもあるからである。こうして同じ宗派であっても、ある教会と他の教会とは階級がかなり異り、ある教会はむしろ他宗派のある教会と近似しておりさえする。各宗派の上層部をとつてみると、教会の姿は極めて似てくる。指導的な位置の洗礼派の教会は、同じ位置の組合教会と殆ど区別がつかない。⁽⁷⁷⁾ こうしたことを念頭にして各派の階級をみてみよう。

ユニテリアンは前述のごとく、一八世紀末から一九世紀初めにかけてデイセンター中最も目立つ存在であって、知的でありかつ最も豊かであった。彼らは急進的にもなった。⁽⁷⁸⁾マンチエスターを中心に北部産業地帯には有力なユニテリアン社会があった。⁽⁷⁹⁾このユニテリアン社会には世紀かわりめの時期、最も富み最も教養豊かな巨大企業家達⁽⁸⁰⁾がいたのである。工場主、貿易商、専門職、特に医師が多くおり、彼らは当社会の中では重要な存在であった。ただ、全国的にみれば境界線上にある人達である。文学・哲学協会を(マンチエスターでは早くも一七八一年)に設立したり、また科学を優位した文化様式として重視したりしたのは、境界線上にある人達が自己を社会的に正当化⁽⁸¹⁾するあり方でもあったろう。それはユニテリアンがもっていた合理的で、世俗的な性格によるものでもあったろうが。

クエーカーは北部⁽⁸²⁾、南西部に、また都会ではロンドン、プリストル、ノリッジに多かった。彼らはもともとは農村や都市のプチ・ブルジョワジーの出であり、上層階級や下層階級の者はごく少なかった。これが一九世紀になると逆になる。⁽⁸³⁾上層中産階級(専門職や大雇用主)が増えてくるのである。ブライト一家は綿工場主であり、実業家であった。クエーカーには貧しい人々が少なくそのことでもよく知られていた。⁽⁸⁴⁾クエーカーのブライトは「この派は大衆をしめ出す」といつている。⁽⁸⁵⁾ユニテリアン以上に大衆に関心をもたない。G・M・トレヴェリアンによれば、彼らの信仰は工場主のものであり、労働者がつよなものではないという。

あるメソジストの歴史家によれば、⁽⁸⁶⁾メソジスト運動は一九世紀初期、産業革命を生ぜしめた中産階級、また産業革命によって生まれた中産階級の中から「その大多数の信奉者」をえたという。メソジズムはこうして多くの人々が社会的階段を上るのを助け、北部産業都市の多くの⁽⁸⁷⁾成り金⁽⁸⁷⁾に訴えた。他方、それがどのような形にせよ労働階級大衆に信仰を広げようとしたことはない。メソジスト教会はこの点国教会と正反対の方向をとりつつあった。国教会はそれまで長く無視してきた労働階級に、緩慢かつきこちなくではあったが目を向けたのである。⁽⁸⁷⁾メソジスト教会といえ、この

階級から出ながら、多くの地域でその卑しい係累を払い流そうとしたのである。

一九世紀前半既にメソジストはいくつかの派に分裂する。▲主流▼のウエズレイ派以外ではカルヴァン主義的な^{プリミティブ}原始メソジストの信者が最も多く、この派には階級のよくない者が多い。炭坑夫、釘作り、漁夫が特に多い。「ウエズレイ派はリスベクタピリテイの祝福か、呪いかをうけるが、プリミティブ達は——巡回説教師（牧師）、地方的（世俗）説教師、会員、信者いずれも——地位が低いままであつた。⁽⁸⁸⁾人数もそれほど多くはなく、五一年に会員は一〇万少々であり、ウエズエイ派と比べると、三対一の割合にすぎない。一八〇〇年から五〇年までの伸びもウエズレイ派が大きく、人口の伸びの二倍にもなる。こうしてリスベクタブルな中産階級はメソジストの▲主流▼ということになる。労働階級を抱えているメソジスト教会は主として特殊なタイプの村落とか小さい町とかだけである。鉦山村落では成功は目ざましかったといえる。現に原始派は大きな都市にはいない。

ロンドン、ポーツマス、プリストル、プリマス、リヴァプール、マンチエスター、バーミンガム、リーズ、ブラッドフォード、ニューカール・オン・タインその他いくつかの大都市をみよ。さし迫つた必要と強力な資源と比べてみて、原始派教団が彼らのためになしたことのいかに少ないことか。：共同体の教会組織が小さい町や村でと同じようにここでは効果的に作動するようにはできないのであろうか。⁽⁸⁹⁾

五一年国勢調査によれば、大都市では、メソジストでいえばウエズレイ派が強く、彼らには中産階級の者が多い。労働者が比較的にいるのは小さい町である。そこでは雇用者と被用者との関係が密接で、労働者は雇用者の宗教をもつよう説得される。メソジストの雇用者はちょうど村で郷紳達が果している役割をそこで果したのである。村の教会が古くから富裕な者と貧しい人々の集まりの場となつたように、彼らの教会が豊になつたばかりの人達と貧しい人達の集まりの場となつたのである。⁽⁹⁰⁾

組合教会派も中産階級が圧倒的に多い、一八世紀から一九世紀にかけ上層階級と教養ある層の比重が減り、中産階級、

それも下層中産階級の比重が大きくなったのである。⁽⁹¹⁾ 一九世紀半ば以後は事務員層ホリイット・クラスが増え、この層にくい入った。一般に大都会で優位を保つデイスンターはメソジストであった。ロンドンでは別で、組合教会派が優位していた。それも多いのは、ハンプステッド、ブリクストン、ハイベリ、クラップナムなど、拡大しつつある豊かな郊外地区である。⁽⁹²⁾ 普通の下層中産階級が多く住む郊外、特にテムズ河南部ははっきり洗礼派とメソジストが根を張っていた。ケンジントン、チェルシー、ベイスウォーターなど、開けつつある比較的よい郊外地区は国教会が強く、組合教会派はまずいない(アリストクラットの住む中心部、メイフェアやセント・ジェームズ、またベルグラヴィアはむしろである)。貧しいイースト・エンドにも殆どいない。

組合教会派のリーダー達も、自分の派がイギリス社会の堅固な階級、中産階級に根をもつことを誇る。五二年E・ジョーンズ師は「われわれは、この国の強さと廉直さの、知性と勤勉の背景である中産階級の人々をかくも多くかかえていることを重要で喜ばしい事実であるとみる」といつている。⁽⁹³⁾ 独立派インペンデントの人々には繁栄するイギリスの商工業者の中でも特に目だつ人達がいる。あるノンコンフォーミストは六九年ランカシャーについて「より重要ないくつかの都市において彼らはより大きくより有力な組合教会派を集めている」と述べている。⁽⁹⁴⁾ J・パーカーは若き牧師としてマンチェスターにいた五八年「総ての人々が財布をみせびらかしながら私を見ていたことを思い起す」といつている。⁽⁹⁵⁾ この地区の組合教会派はとんでもなく豊であったが、他の地域でも同様であった。彼らの財産は「主として商業からえられたものである」。⁽⁹⁶⁾ 八〇年頃組合教会派連合の議長は「イギリスのノンコンコンフォーミストの中で恐らく最も豊かであろう」といつている。なかでも有名なのは、前述のS・モーレイである。彼はタフでかつ慎重、辛抱強さ、勤勉、知性、廉直という性格の、イギリス商業階級の典型的な人物であった。自由党支持であったばかりか、労働者の品性を高め、彼らを政治に参加させようとする典型的なニューモデルの自由—労働主義者でもある。ただ労働者達が正直で、かつ服従

的であることを欲するヴィクトリア朝のキリスト教雇用者であった。

洗礼派の階級は組合教会派のものに似ているが、それより低い。後者には労働者（特に日雇い）は殆どいないが、洗礼派の教会の中には階級の低い労働者が多い教会も少なからずある。両宗派は似ているようで、この点かなりの相違があった。⁽⁹⁷⁾テムズ河北部のロンドンの洗礼派教会は殆ど総て労働者が大多数であった。⁽⁹⁸⁾牧師もそれほど学識がなかったし、読み書きのできない信者も多かった。

ノンコンフォーミストの主体は商工業に従事する中産階級であり、その中にはかなり豊かな者がいる。これに比べ労働階級の者、特に貧しく非熟練の労働者はごく少ないとされてきた。実際、布教の対象は中産階級が中心であり、一九世紀中葉以前には労働階級はそのまともな対象にならなかつたとさえいえる。洗礼派の中では大衆に布教しようとする者はいたが、大都市ではあまり成果はあがらなかつたように思われる。せいぜいランカシャーと西ライディングの紡績工や織布工ぐらいの間だけである。「彼らは都市の形態に問題があるとはみなかつた」。⁽⁹⁹⁾

組合教会派の場合には確かに布教精神の復活があつた。『イングランド・ウエールズ組合教会連合』（フェデラルな全国組織）の集会で、変動する社会での精神的な貧困の問題が再三とりあげられた。ところが三七年連合委員会は大衆の間では宗派が殆ど伸びていないと指摘している。四〇年にも、信仰なき町の労働階級や、村々の無知で無関心な人々、またトラクト主義の潜在的 \wedge いけにえ達 \vee に何とかくいこまねばならないとした。A・ウエズレイ（連合書記）によれば、⁽¹⁰⁰⁾労働階級は「ローマの熱情によつても改宗されていないし、ウエズレイ派の熱烈さによつても長く集められないし、独立派やバプテイス脱教師のより知的な論議によつても引きつけられていない」という。彼がいうには「われわれの教会制度の働らきは労働階級に喜ばれる側面を呈示するには余りにもアリストラティックな性格になつてゐる」と。

この派の中産階級性格が労働者達を遠ざけているというのである。とはいえ、彼は、中産階級性格が派の大きな強みであり、「多くの職人達がわれわれのもとに集まるという結果を生みえたとしても、この性格を変えてはいけない、というのは、その場合には、われわれが職人達に加わってゆくことになってしまい、彼らがわれわれに加わることにならないからである」という。恐らく神は組合教会派が中産階級のための奉仕を持続するよう意図され給うたのである。こうした見解はウエズレイだけのものではない。連合議長のT・ピネイもこの問題で論議が起こった時、「われわれの使命は最も裕福な人達や最も貧しい人々にはなく、社会の重要な中流の部分に向けられている」とい⁽¹⁰⁾ている。デイセンターはエリートであるとし、信者を増やそうとしない者さえ少なからずいた。

一九世紀初め組合教会派の中には、神はこの派が中産階級の人々を牧することを欲し給うと信ずる者がいたが、五〇年以後はさすがにこうしたことを口にする者はいなくなつた。フォーラムにおいて労働階級の靈的状态についてはしばしば論議がなされるようになり、連合の年次集会で労働者達の別の集りも開かれるようになった。にも拘らず、五〇年から一九〇〇年までの組合教会派の教会をみるとその大部分で労働者の世話役はまずでていない。五二年の連合の集まりでジョーンズ牧師は「職人と労働者はわれわれのサークルの中に殆どひきいられていない」とし⁽¹⁰⁾たし、七二年、組合教会派のある牧師は「わが組合教会派は大部分中産階級に属する」とい⁽¹⁰⁾っている。この派で最も尊敬をうける牧師となつたパーミンガムのデイルは若い頃、貧しい人々をひきつける必要を説き、六九年連合の議長の時にも「説教者の大軍が労働者の中からでてくる」ようにしたいものだ⁽¹⁰⁾と云つた。ところが、彼も独立派の使命は貧しい人々には向いていないというようになり、人々を驚かせた。九一年彼は、組合教会派の特別の布教対象を下層階級までのばさなかつたし、そうしようともしなかつたというアメリカの独立派の者に同意の意を表したのである。デイルがいうには、他の総てのキリスト教徒と同様、組合教会派も下層の人々に対し義務を負つてはいるものの、これは特別の使命とはいえないとし

ている。⁽¹⁰⁵⁾ 彼は労働階級の福音主義者の軍勢を求めた。しかし今やW・ブースがこの軍勢を集めるだろう、救世軍が貧しい人々を牧し、独立派はより高い階級の人々に力を注ぎうるのだ、というのである。⁽¹⁰⁶⁾

実際、ノンコンフォーミストは貧しい人々の道徳的問題については強烈な関心を払ったが、労働者の産業関係にはそれほど関心を払わなかった。せいぜい、微温的な平和的解決（仲裁など）を奨めたり、ストライキ中の労働者の妻子に慈善を施すくらいであった。⁽¹⁰⁷⁾

労働階級の信者の不断增加を明言しうる唯一のキリスト教集団はカトリックのみであった。この増加はアイルランドからの移住者とその子孫の増加によって著しく加速された。カトリック教徒は一八世紀初め社会的、法的に不利な立場におかれ、⁽¹⁰⁸⁾ 世紀末まで減少し続けた（一七二〇年の一萬五〇〇〇人から七〇年の七、八万人）。ところが一八五〇年までに信者は一〇倍も増え、七〇万人近くなる。増加は産業地帯に移り、農村から都市への流入があった。「この人数及び場所の変化は社会的変化をもたらし、実業家や専門職の家族を頂点とする労働者、職人、商店主、窮乏者の会衆がジェントリ、農夫、農業労働者、田舎職人の会衆に代った」⁽¹⁰⁹⁾。

ノンコンフォーミストの主体をなすのはこのように様々なタイプの中産階級であった。宗派によって中産階級といえる人でもタイプに違いがある。ユニテリアンとクエーカーには、専門職と雇用主が多い。組合教会派には、産業者から事務員まであらゆるタイプの中産階級の者がいるが、労働者はごく少ない。洗礼派は組合教会派よりも階級が低い。ウエズレイ派には、富裕な銀行家も少なからずいたが、この派は商店主の中で強く、農村では農業労働者も多くひきつけた。労働階級はノンコンフォーミストの中では傍流である。彼らはカトリックを除けば多くはなく、労働階級の人々といえ、小さい町で働らく職人層とか、雇用主とフェイス・トユ・フェイスの関係にある労働者、そして多くは熟練労働者

働者である。宗派でいえば、原始メソジストや救世軍に多い。ここでは労働階級が圧倒的に多く、事務員や商店主、農夫や教師がこれにまじるていどである。⁽¹⁰⁾ただ注意すべきことは、宗派間で階級の色合いはこのように違いはあれ、各宗派とも、その中で階級をこえて一枚岩的な一体性があつたわけではないし、各宗派がこの一体性をもって他の宗派と対立していたわけではない。階級の相違にしても、宗派と宗派の間の相違よりは、同一宗派内での信徒団、あるいは個々の教会間での相違の方が顕著であるといえよう。既に述べたように、組合教会派、洗礼派の中で指導的地位にある教会をみると、両派の間で階級に殆ど相違がない、実際、ノンコンフォーミストの場合、国教会以上に階級によつて自分達を区別し、個々の教会にはそれぞれ比較的同質の者が集つたように思われる。国教会の場合は多様な人々がおり、彼らには一つの教区教会に属するという——同質性ではないにしても——一種のまとまりの意識があつた。

商工業者達（ブルジョワジー）のエトスはかつてよく物質財の獲得と消費を最大化しようとする自己利益中心の個人主義であるとされた。⁽¹¹⁾しかしヴィクトリア時代の「セルフ・メイド・マン」はそうではない。そのエトスは、欲望の限りなき満足を追求するどころか、意志を通じて、感覺的欲望を抑えること、そうした性格をもつことにあるとされたのである。当時よくいわれた中産階級の徳目はこの性格の一連のバラエティである。ヴィクトリア時代の「性格」形成の高僧ともいふべきS・スマイルズ（一八一二—一九〇五）によれば、自己教化、自己抑制、精力、勤勉、節約、儉約、慎重、忍耐、ねばり、正直、廉直、節制、節酒、独立、男らしさ、責任感がそうである。これらは個々人の生活を堅固なものとするとともに、社会的な結びつきをも強固にする。イギリスが偉大になつたのもこれらの徳のためであつたとされる。そしてこれらの徳目や性格は何よりもノンコンフォーミズムと結びついていた。

政治的にいえば、自由党は急進派や改革派を通じ、労働階級の一部、職人層や熟練工、また彼らの集団である労働組合のメンバーをひきつけ、とり込むことができた。これが自由—労働主義といわれるものである。これを可能にする

要因はいくつか考えられる。労働者とその雇用者はその工場規模が小さく、フェイス・トゥ・フェイスの関係にあり、経済的利害の一体性を強く感じえたであろう。また、政治的に、大土地所有者に共に対抗しようという意識で協同し合
 いえたであろう。その場合、政治的に熟達した労働者のリーダーにおいては、自由党の資本家的雇用階級の者と政治文化を共通にするようになつたであろう。自由——労働主義はこうした政治文化の類似性を基礎にしていたとみられる。さらには、政治文化のみならず、労働者のあるタイプ、△リスベクタブルな▽労働者は中産階級の——スマイルズの——エトス（あるいは性格）や文化さえ身につけもした。「労働階級は宗教的及び社会的要因から生まれる同じような精神状態をもちながら、中産階級とともに眞の自由主義者になつた」であろう。⁽¹⁴⁾この同質性の感情は「ヴィクトリア朝中期の産業資本主義の構造とエトスに根ざ」したかどうかは別とし、「自由主義として知られるようになった広い国民的政治文化として」結晶したであろう。⁽¹⁵⁾こうした結晶は、一つには一八六〇年から八〇年までの間になされたブライト、J・S・ミル、グラドストーン達の努力の給ものであるかもしれない。だが、それを可能にした広範な基盤、その重要な一つの基盤がプロテスタンティズム、とりわけノンコンフォーミズムであつたことは否定しえないところである。それが中産階級とともに、労働者、主として熟練労働者達に、勤勉、規律、忍耐、節制のエトス（性格）を付与し、彼らにリスベクタブルな存在にした。そしてこのエトス（性格）の共通性が中産階級と彼らを政治的に近づけ、この接近が政治的共同行動、自由——労働主義を促がしたのである。

労働階級のある部分は、一方で職業上の熟練に支えられ、他方で中産階級のエトスと生活パターンを身につけることによつて、△リスベクタブルな存在となつた。これを可能にした重要な要因の少なくとも一つはノンコンフォーミズムであつた。中産階級と労働階級の一部は——アリストクラシーとの対抗と競合というような——政治的必要性からも、政治的に協力し合うことができた（自由——労働主義）。しかしながら、リスベクタピリティとは独立のエトスでもある。

確かに、中産階級の改革主義者は、改革のために、あるいはアリストクラシーとの対抗のために政治的に労働者に接近した。それでも双方は社会的、文化的にひき離される。家族生活の在り方、持ち家、サロン、それにノンコンフォーミストの教会(同じ宗派の者であっても、教会により階級のニュアンスがあった)などが異なった。改革主義の人達さえこの塀をのり越えることができなかった。たとえ政治的に共同行動をとりえたとしてもである。ノンコンフォーミズムもこの壁をこわすことができなかったであろう(スマイルズは共通のエトスを説きながら、政治的共同行動を説くまでも至らなかつた)⁽¹⁶⁾。そして貧困層はむろんのこと、半熟練労働者もそうした枠の外にあつたのである。

労働組合や協同組合は労働者の自助の組織化であつたが、世紀の代り目頃から労働階級独自の政治行動が始まる。労働党の形成はその端的な現われである。労働階級は中産階級からうけとつたエトスやリスベクタビリティを、中産階級に向き合う形で実現したのである。ノンコンフォーミズムはエトスやリスベクタビリティの伝達の仲だちであつたが、同時に分離(独立)のエトスを供給したといえるであろう。独立した労働階級にはこのエトスと精神が満ちている。彼らの思想の基盤をなしたのは、フランス革命や社会主義(特にマルクス主義)のイデオロギーではなく、このエトスと精神である。独立性に向つた労働階級や労働党は、当初は自由党と連繫しつつ、やがて第一次大戦後、独立した足取りをとつてゆく。知識人は社会主義をイデオロギーとさせる、しかし労働党の精神的基盤をなしたのは独立性のエトスと精神、リスベクタビリティを根とするものであつた。

第一節 註

- (1) Cobden to Bright, 30 Aug. 1852, Cobden Papers. なお、拙著『英国自由主義体制の形成』三五六―七ページ。
- (2) P. Anderson, 'Origin of the Present Crisis' N. L. R., no. 23, 1964.

(3) E. Hobsbawm, 'The Formation of British Working Class Culture', *Worlds of Labour: Further Studies in the History of Labour*, (1984) p.182.

(4) ホップスボウムの見解は「労働貴族」の保守化と密接に関連づけられているが、熟練労働者の急進主義的側面を見落している。社会主義のみが急進主義を現わすものではない。本論稿の論点の力説の一つはここにある。

(5) D. A. Hamer, *A Liberal politics in the age of Gladstone and Rosebery: a study in leadership and policy*, 1972 Chap. 1は「各派を「セクション」としてこの点を追求している。チェンバレンは全国教育連盟以後、急進主義の統一綱領を作り、急進派の統一をはかったが、成功しなかった。ibid., pp.45-6; R. T. Shannon, *Gladstone and the Bulgarian agitation 1876*, (1975 2nd edn), p.273.

(6) Cobden to G. Combe, 5 Jan. 1849; J. Morley, *Richard Cobden*, 1879, p.506. 一月軍縮を中心とする大幅な予算削減の彼の動議は、七八票の支持しかえられず、圧倒的多数で否定された。W. Hinde, *Richard Cobden, A Victorian Outsider*, 1987, pp.199-200.

(7) 四八年のヨーロッパの動乱時ヒュームは七月議会改革の動議を提出し、八四票の票しかえられず、惨敗した。コブデンは支持はしたが、それほど積極的ではなかった。Hansard, C.181\95, 6 July 1848; Hinde, ibid., p.192.

(8) Hinde, ibid., p.195. 一人は反穀物法同盟と共に戦っている時にも、メイヌート校助成法案(前掲拙著第七章第一節参照)審議においても反対の立場をとった。教育・教会問題では立場が違ったのである。K. Robbins, *John Bright*, 1979, p.57. ちなみにコブデンは国教徒。

(9) モールズワースがアバディーン内閣に入閣し(五二年)、急進派の大立者であったJ・ヒュームが死んで後は、「一時の不人気にも拘らずなお一般に第一級の政治的重要性をもつ人物としてうけ容れられていたコブデンとブライトは、五六年においてさえ議会開期での重要な教育論議において理想的な急進派のスポークスマンと認められた」のである。S. Maccooby, *English Radicalism 1853-1886*, (1938) p.53.

クリミア戦争の二人の孤立については、A. Briggs, *Victorian People. A assessment of persons & themes 1851-1867*, 1935, chap. IIIによく描かれている。ただ、ブライトは議会外では不人気となったが、議会内では名声を高めた。私が政府や議会の政策に反対しているにも拘らず、議会での私の立場は悪くなるどころか良くなっている(『日記』五四年八月)。

- (10) Briggs, *ibid.* (『ヴィクトリア朝の人びと』) 村岡・河村訳二七一―二二二ページ。
- (11) 同二五九ページ。
- (12) 節を改めて述べる。
- (13) 前掲拙著第七章第一節参照。クラレンドン卿のヴィリアーズはじめ、ウィックのデュシー、ウェストミンスター、フィッツウイリアム、モーベス、ラドノア達が同盟を支持した。
- (14) K. Robbins, *op. cit.*, p.71.
- (15) コブデンはいう。「わざわざ骨をおって軽蔑を招き、しかも大地主のアリストクラシーにいいようにされるとは」と。A. Briggs, *Victorian Cities*, (1990) P.129.
- (16) Bright to G. Wilson, 5 Nov. 1845; Robbins, *op. cit.*, p.73.
- (17) Robbins, *ibid.*, p.91.
- (18) フリックス、同二七二ページ。
- (19) N. C. Edsall, *Richard Cobden, Independent Radical*, (1986) pp.21-4. Hinde, *op. cit.*, chap. 10. A. J. P. Taylor, *The Trouble Makers*, (1957), chap. 11.
- (20) Speech of 7 June 1855; Taylor, *ibid.*, p.62. テイラーによれば、「不介入はコブデンにとっては政策の出発点であったが、ブライトは、不介入が彼にとって目的であるという印象をしばしば与える」という。ただ、彼はクエーカーであったが、絶対平和主義者ではない。Robbins, *op. cit.*, pp.99-100. なお、クリミア戦争中ブライトは、下院では、議会外でほとんど不人気ではなかったという。ブリックス、同二八一―二二二ページ。
- (21) Robbins, *op. cit.*, p.125.
- J. Skinner, 'The Liberal nomination controversy in Manchester, 1847', *Bulletin of the Institute of Historical Research*, V (1982), p.215-18. この時の選挙で、一方のコブデン、ブライト、同盟の側、他方の『マンチェスター・ガーディアン』紙のグループの間でアリストクラットの候補擁立問題をめぐり分れた。反穀物法運動で双方は共同したが、マンチェスターの自由主義には本来保守的で服従的な要素があった。五七年選挙の時については D. Fraser, *Urban Politics in Victorian England*, (1976) pp.205-6. なお拙稿「ウィックの衰退と終焉」『北大法学論集』第四三巻第四号参照。Fraser, 'The middle

- class in nineteenth century politics', Garrard, J. et. al., *The Middle Class in Politics*, (1978) p.90; Taylor, *op. cit.*, p.62.
- (22) Robbins, *op. cit.*, p.126.
- (23) Robbins, *ibid.*, Part. Three, 7; Hinde, *op. cit.*, chaps. 11, 12.
 フライトは、五六年肉体的及び精神的に衰弱し切り、コブデンは唯一の息子を失った。
- (24) 五八年余りにも露骨な貴族院やアリストクラシー批判をなしたため、女王の不興をかい、五九年のパーマーston内閣成立の時、入閣しえなかつた。Robbins *ibid.*, p147. マンチエスター選出急進派議員ミルナー・ギブソン、やがて穀物法廃止で有名な議員C・P・ウイリアーズが入閣したにも拘らずである。
- (25) ブリックス、同二六五ページ。
- (26) J. Chamberlain, *The Times*, 1 Aug. 1889. フライトとチエンバレンとの関係については、R. Quinault, 'John Bright and Joseph Chamberlain', *Historical Journal*, 28, 3, 1985.
- (27) R. Harrison, *Before the Socialists*, 1965, chap. 11. なお同『近代イギリス政治と労働運動』(田口富久治監訳)一九七二年、第一章「イギリス労働者とアメリカ奴隷制」。
- (28) ハリソン、同三七ページ。
- (29) R. Harrison, 'British Labour and the confederacy', *International Review of Social History*, Vol. 11, 1957, Part I. なお、ハリソン、同三七ページ。J・モーレイによれば (Fortnight Review, Oct. 1870) 「アメリカでのどちらの陣営に組するかは、ここイギリスにおける一種の内戦であつた。無言の本能がイングランドにおける相互に敵対的な階級に啓示したことは、自分達の戦いがまた自由な北部と奴隷所有の南部の間の戦いに現れているのだということであつた」(同)。
- (30) K. Marx, *Capital*, V. I (1938ed.) p. xviii. ハリソン、同五一ページ。
- (31) G. Howell to Bright, 7 Oct. 1867. ハリソン同五二ページ。
- (32) Robbins, *op. cit.*, Part Four, 9.
- (33) Maccoby, *op. cit.*, chap. IV, V. パーマーストン政権下の政界の抑えと《保守性》(immobilisme) については、P. M. Guro-wich, 'The Continuation of War by Other Means: Party and politics, 1855-1865', *H. J.*, 27, 3, 1984.
- (34) M. C. Finn, *After Chartism - Class and nation in English radical politics, 1848-1874*, (1993). 著者は大陸の政治的動乱くの

反応を通じ、イギリスの急進主義の一貫性をみようとするが、急進派が外国の政治的動乱への反応という形でしか動きえなかったのだという側面を軽視している。確かに、六四年のガリバルディの来英は労働者達の(選挙法)改革連盟の結成への刺戟とはなったが。*Ibid.*, p.219-20, 237.

- (35) G. I. T. Machin, *Politics and the Churches in Great Britain 1832 to 1868*, (1977) p.322.
- (36) J. S. Trelawny, diary, v. p.168 (18 June 1862); Gutovich, op. cit.
- (37) Cobden to Cassel, 6 Sep. 1850; Hinde, op. cit., p.240.
- (38) 一応経済状況をみておこう。一八六二―四年に特にランカシャーに綿飢餓がある。また六六―九年、七八―九年、八四―六年、九二―五年、一九〇三―五年、八―九年と、循環的不況――失業の危機があった。綿飢餓は南北戦争中である。
- (39) H. C. G. Matthew, *Gladstone, 1809-1874*, (1986) chap. V. 拙稿『ウイッグの衰退と終焉』、『北大法学論集』第四三巻四号参照。グラドストンの入閣と政策は急進派の鎮静にも役立った。急進派のミルナー・ギブソン、C・P・ヴィリアーズの入閣もそうである。
- (40) M. Bentley, *Politics Without Democracy, 1815 - 1914*, (1984) p.181.
- (41) Robbins, op. cit., p.199.
- (42) Bright to S. Fox, 25 Oct 1866, Bright MS, Hreet; Robbins, *ibid.*, p.189.
- (43) 選挙法の改正には、単に二大政党間の抗争のみ (G. L. Dickinson, *The Development of Parliament During the Nineteenth Century* (1895) p.54) のみでなく、広範な労働者大衆の運動や選挙法改正連盟の動きがあった」とは見逃せなく。A. Briggs, *The Age of Improvement*, (1959) p.511. またハリソン、同第三章。
- (44) Robbins, op. cit., p.204.
- (45) T. W. Heyck, *The Dimensions of British Radicals: The case of Ireland*, (1974); Bentley, op. cit., p.216.
- (46) Bentley, op. cit., p.216.
- (47) J. P. Rossi, 'The Transformation of the British Liberal Party: a study of the tactics of the Liberal opposition 1874-80', *Transactions of the American Philosophical Society*, 68\8 (1978), p.17.
- (48) Parry, *Democracy and Religion*, pp.144-5. 教授は、六八―七四年議会で、非国教化の問題で、それに賛成投票したり、七

- 年教育法の審議で世俗主義（後述）の立場をとった者を「急進主義者」としている。教授は宗教的観点を重視して分類しているのである。
- (49) J. S. Mill to W. T. Thornton, 8 Dec. 1869, *Later Letters*, p.1548n; Robbins, op. cit., p.205. 六八年以後のフライトの政治的活動への評価は比較的低い。G. M. Trevelyan, *The life of John Bright*, (1913) pp.3-4. ロビンス教授も、六七年以後の自由党の中樞にいたというコウリング教授の説 (M. Cowling, 1867: *Disraeli, Gladstone and Revolution*, 1967) を否定する。R. Jay (*Joseph Chamberlain, a political study*, 1981, p.47) も同様である。
- (50) Robbins, op. cit., pp.209-10.
- (51) A. O'Day, 'The political Representation of the Irish in Great Britain, 1850-1940', *Government, Ethnic Groups and Political Representation*, ed. G. Alderman, (1993) p.32.
- (52) Robbins, op. cit., pp.82, 202.
- (53) フライトは、ヤガてクランドストンが提案するアイルランド自治法案には、反逆者に屈するものとして死ぬまで反対であった。Robbins, *ibid.*, pp.199-200, 258-8; Trevelyan, op. cit., p.446.
- (54) フリックスズ、同二三三二ページ。
- (55) E. Hobsbawm, 'The Labour Aristocracy in Nineteenth Century Britain', *Labouring Men, Studies in the History of Labour*, 1964; *The Aristocracy of Labour reconsidered*, *Worlds of Labour*, pp.227-51; Harrison, *Before the Socialist*, I. 熟練労働者は技師、及び建築関係の労働者に多いとされている。J. B. Jeffreys, 'The Wages, Hours and Trade Customs of the Skilled Engineer in 1861', *Econ. Hist. Rev.*, XVII, 1947, p.30n; Harrison, *ibid.*, p.26n.
- しかし比較的高賃金の《労働貴族》という概念は当時の労働者の説明には不完全である。H. Pelling, *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain*, (1968). 労働者の地位 (respectability) は他の様々の要因に依存する。
- (56) B. Harrison, 'Traditions of Respectability in British Labour History', *Peaceable Kingdom*, 1982; C. Hibbert, *London*, 1969 (横山徳爾訳三〇一―四ページ); C. Booth, *Life and Labour of the People in London*, 1902-4 参照。なお小川晃一『英国社会における伝統と変化』(一九七三)九五―六、一七八―九ページ参照。
- (57) R. J. Morris, 'Samuel Smiles and the Genesis of Selb-Help; The Retreat to a Petit Bourgeois Utopia', *H. J.*, 24, I 1981. 『自

- 助』の出版は五九年である。出版されるや直ちに二万部売れ、以後も世紀の代り目頃までにはよく売れた。しかしモリスの説によれば、『自助』はヴィクトリア朝の楽観主義のものでなく、四〇年代の暗さを背景にした暗い孤立的自助であるという。
- (58) ブリックス、同一七三―四ページ。
- (59) *Spectator*, 20 July 1861; Harrison, *op. cit.*, p.38.
- (60) Briggs, *Victorian Cities*, p.190.
- (61) Harrison, *op. cit.*, p.38.
- (62) *Ibid.*, p.39.
- (63) *Ibid.*, p.37.
- (64) A. I. Mundella to Leader, 31 Dec. 1873; D. A. Hamer, *Liberal Politics in the age of Gladstone and Rosebery*, p.16.
- (65) T. Thomas, 'Representation of the Manchester working Class in Fiction, 1850-1900', *City, Class and Culture, Studies of cultural production and social policy in Victorian Manchester*, ed. A. J. Kidd and K. W. Roberts, (1985) p.198.
- (66) G. Jewsbury, *Marian Withers*, (1851) p.289. 他方、世紀前半のマンチエスターの暗さを描いた小説としては、ガスケル夫人の *Mary Barton* (1848) がある。A. Briggs, *Victorian Cities*, (1963) p.99. なお、*Ibid.*, p.111.
- (67) ただし、産業革命などは、既に安定した財産と地位をもつ家族（ピール家とかアッシュワース家とかケレク家など）の者によってリードされたという見解が有力となっている。J. Foster, *Class Struggle and the Industrial Revolution*, (1974) chap. 2; W. D. Rubenstein, *Men of Property*, (1981) chap. 4. バーミンガムでも「自力」の者は多くはない。E. Hopkins, *Birmingham, The First Manufacturing Town in the World 1760-1840*, (1988) pp.97-8. ただしマンチエスターについては次節注34参照。
- (68) ブリックス、『ヴィクトリア朝の人びと』二二五―二二六ページ。
- (69) 同一二二ページ
- (70) Briggs, *op. cit.*, p.189. バーミンガムの穀物商のクエーカー、J・スタージは最も際立った例。
- (71) 拙著『英国自由主義体制の形成』二〇―二一三ページ

- (72) これはブリックスの力説するところである。同「八六ページ」。Hopkins. *op. cit.*, chap. 8, 9.
- (73) R. J. Morris, 'Voluntary Societies and British Urban Ellites, 1780-1850: An Analysis, *H. J.*, 26, I, 1983, 26, I, 1983. バーミンガムにおいては, Hopkins, *ibid.*, pp.155-6.
- (74) 前掲拙著一九七二〇一ページ。
- (75) Briggs, *op. cit.*, p.47.
- (76) Morris, *op. cit.*, p.115.
- (77) *The Leeds Building and Investment Society*, handbill, 1846; Morris, *ibid.*
- (78) Morris, *ibid.*
- (79) Morris, Samuel Smiles and the Genesis of Self-Help: The Retreat to a Petit Bourgeois Utopia, *H. J.*, 24, I, 1981.
- (80) E. Baines, junior, *The social, educational and religious state of the manufacturing districts and Leeds*, (1843) pp.24-5.; Morris, 'Voluntary Society', p.115.
- (81) *Ibid.*
- (82) G. W. Hastings, 'Address of the Chairman of the Council, 1870', *Transactions*, 1870, p.106; L. Goldman, 'Henry Fawcett and the Social Science Association', *The Blind Victorian, Henry Fawcett and British Liberalism*, ed. L. Goldman, 1989, p.149.
- (83) *Daily News*, 2 Oct. 1873, 3 Oct. 1881; Goldman, *ibid.*, p.150.
- (84) [L. Brentano], 'The Growth of a trade-union', *North British Review*, vol. 53, Oct. 1870- Jan. 1871, p.113; Goldman, *ibid.*, pp.158-9.
- (85) Goldman, *ibid.*, p.159.
- (86) J. R. Vincent, *The Formation of the Liberal Party 1857 - 1868*, (1966) p.77.
- (87) *Ibid.*
- (88) Hamer, *op. cit.*, p.18.
- (89) M. Richter, *The Politics of Conscience, T. H. Green and his age*, (1964) p.259-76.
- (90) R. Bellamy, *Liberalism and Modern Society*, (1992), pp.17-21, 35-47.

- (91) F. Harrison to E. S. Beesly 教授。Harrison, *op. cit.*, p.257.
- (92) Bright to Congreave, 12 Nov. 1858; F. Harrison to Beesly, 1858; Harrison, *ibid.*, p.258.
- (93) F. M. Leventhal, *Respectable Radical*, pp.47-8; Robbins, *op. cit.*, p.164; Harrison, *ibid.*, pp.70, 259.
- (94) Robbins, *ibid.*, p.175.
- (95) Parry, *op. cit.*, p.70.
- (96) Harvie, 'Ideology and Home rule: James Dicey, A. V. Dicey and Ireland, 1880-1887', *EHR*, xci (1976).
- (97) G. Smith, *Essays on questions of the day: political and social*, (2nd edn. 1894), pp. 96-7; A. Haultain, *Goldwin Smith: his life and opinions*, (1914), p.53; Parry, *op. cit.*, pp.251-2.
- (98) Smith, 'The defeat of the liberal party', *Fortnight Review* xxii, (July 1877); Parry, *ibid.*, pp.7-8.
- (99) Harvie, *The Lights of Liberalism*, (1976) pp.23-7.
- (100) L. Stephen, *Life of Henry Fawcett*, (3rd edn) 1886, pp.238, 263.
- (101) Parry, *op. cit.*, p.249. チャップマンはニルからウエストミンスター評論を譲り受け、エリオット (メアリー・アン・エヴァンス、一八一九-八一) は事実上の編集者になった。エリオットは『サイラス・マナー』など小説を書く小説家となる。
- (102) *Ibid.* pp.249-50.
- (103) Beccattini, 'Henry Fawcett and the labour question in mid-Victorian Britain', *The Blind Victorian*, pp.156-7. ハーヴィ教授によれば、「実証主義者、キリスト教社会主義者、観念論者、功利主義者」等様々のものがいた。Harvie, *Lights*, pp.20, 141. アカデミックな自由主義については、C. Kent, *Brains and Numbers: Elitism, Comtism, and Democracy in Mid-Victorian England*, 1978.
- (104) Harvie, *ibid.*, p.79.
- (105) Parry, *op. cit.*, p.250. 彼らは『フォウセツト派』ともいわれていたという。本文〇〇ページにあげた人達である。
- (106) *The Economist*, 8 Feb. 1873; L. Goldman, Introduction 'An advanced Liberal': Henry Fawcett, 1833-1884, *The Blind Victorian, Henry Fawcett and British Liberalism*, p.16.
- (107) L. Stephen, *Life of Henry Fawcett*, 1885.

- (108) 商人出身者はケンブリッジでは当時 1% 以下であつたろうとされている。H. Jenkins and D. Caradog Jones, 'Social class of Cambridge alumni of the eighteen and nineteen centuries', *B. J. S.*, vol. I (1950) p.99.
- (109) Fawcett, 'On the exclusion of those who are not members of the Established Church from Fellowships and other privileges of the English Universities', *Macmillan's Magazine*, vol. 3, March 1861, p.414; Goldman, op. cit., p.7.
- (110) 彼は大学のシニア・メンバーの独身制を廃止すべきだとしていた。Fawcett to R. Potts, 17 May 1857; Goldman, *ibid.*
- (111) 拙稿「一九世紀ウィッグの精神構造」(一)、『北大法学論集』、第四五巻第一・二合併号(一九九四年七月)参照。
- (112) Goldman, *ibid.*
- (113) *Ibid.*, p.17; Harvie, 'Fawcett as professional politician', Henry Fawcett, ed. Goldman, p.185. フォウセツトは七〇年代初め、晩さんクラブであるケンブリッジ共和主義クラブの創立者であつた。
- (114) Stephen, *Life of Henry Fawcett*, p.286.
- (115) 中村敏子「淑女から人間へ」、『北大法学論集』、第三八巻四号。
- (116) テーマは「ストライキの理論と傾向」であり、当時の極めて時事的な問題であつた。当時アブルガースの大工・指物師組合のストライキ(五九一六一年)が始まつていた。社会科学協会については前述。
- (117) Fawcett, 'To what extent is England prosperous?', *Fortnightly Review*, vol. 9 (n. s.), Jan. 1871, p.52; Goldman, op. cit., p.15.
- (118) Fawcett's speech in Cambridge and reported in the Times, 8 Jan. 1870; Goldman, *ibid.* の理由づけは、*ミル*の論理(『自由論』第五章、早坂訳『世界の名著』三三六―四〇)に極めて近い。
- (119) 稿を改めて論ずる。
- (120) Fawcett, 'To what extent is England prosperous?', p.51.
- (121) Fawcett, 'The general aspect of state intervention', (1872), *Essays and Lectures*, p.36.
- (122) 労賃の「市場価格」が「自然価格」に比べ、何らかの理由——労働者の情報不足など——によつて低い場合である。G. Beccattini, 'Henry Fawcett and the labour question', pp.129ff.
- (123) Goldman, op. cit., p.16.
- (124) Fawcett to Mundella, 13 Jan. 1875.

- (125) R. Strachey, *Millicent Garrett Fawcett*, (1931) p.88.
- (126) Fawcett to Gladstone, 18 April 1872; Goldman, *op. cit.*, p.18.
- (127) 以下稿を改めて論ずる。
- (128) Goldman, *op. cit.*, p.28.
- (129) *Ibid.*, p.22.
- (130) 郵便小包制導入、郵便・電報料金の引下げ、少額貯金・投資の便宜の改善などである。 *Ibid.*, p.34.
- (131) *Westminster and Foreign Quarterly Review*, No.83 (1865), No.84 (1865)。のち、合せし *Auguste Comte and Positivism* (1865) として出版。
- (132) Harvie, *op. cit.*, p.189。相続は既にそれ以前にあったが。
- (133) Mill, *op. cit.* (村井久二訳) 一四八ページ。
- (134) 同 一五六―一六〇ページ。
- (135) F. Harrison, 'The Gost of Religion', *The Nineteenth Century*, 1884.
- (136) *Ibid.*
- (137) Harrison, *The positive evolution of religion: its moral and social reaction*, (1913) p.108; Parry, *op. cit.*, p.245.
- (138) J. Morley, *Edmund Burke: a historical study*, (1867) pp.309-10; Parry, *ibid.*, p.246.
- (139) Morley, *Critical miscellanies*, iii. p.255; *Edmund Burke*, p.301; Parry, *ibid.*, p.246.
- (140) M. Vogeler, *Frederic Harrison: the vocations of a positivist*, (1984) pp.101-2; Parry, *ibid.*, p.247.
- (141) *ブリックマス*、同 一四〇―一四七―八ページ。
- (142) Parry, *op. cit.*, pp.238-9。フォートナイト評論は最も尊敬される急進派の雑誌であった。
- (143) Morley, *Recollections*, vol.i, (1917) p.147; Harrison, MSS.: Morley-Harrison, 17 July 1873; Harvie, *op. cit.*, p.189.
- (144) *ニル*、同 一三九ページ。
- (145) E. Royle, *Radicals, Secularists and Republicans – Popular freethought in Britain, 1866 – 1915*, (1980) p.129。以下りの著書に
 依拠するところが多い。

- (146) *Ibid.*, p.5.
 (147) NSS の季刊誌 *The National Review*, 1866 の四つの号。
 (148) Royle, *op. cit.*, pp.7-8,
 (149) *Ibid.*, pp.23-8.
 (150) *Ibid.*, p.126
 (151) *Ibid.*
 (152) 教授は主として死亡記事から地方に住んだ一五〇名ほどを資料にしている。 *Ibid.*, pp.127-9.
 (153) *Ibid.*, p.131
 (154) *Ibid.*, p.133
 (155) *Ibid.*, p.135
 (156) *Ibid.*, p.133
 (157) *Ibid.*

第二節 註

- (1) 全人口中のノンコンフォーマリストの割合と、全有権者中のその割合でいずれが大きいかは確定できまいが、後者が前者より少ないとしても、それほどの差はあるまい。
 (2) Machin, *op. cit.*, p.40; McDonald, 'Religion and voting in an English borough: Poole in 1859', *Southern History*, v, (1983) pp.221-37; Parry, *op. cit.*, p.11.
 (3) *Christian World*, 27 May 1886, 3 June 1886; D. W. Bebbington, *The Nonconformist Conscience, Chapel and Politics, 1870 - 1914*, (1982) p.8.
 (4) 前註 48 参照。
 (5) この急進派のうち (Parry, *op. cit.*, p.230.),
 九名は、大学教育で培われた若き急進主義者 (前述のアカデミックな自由主義者)。

七名は、急進的な若いウィックのアリстокラット。通常州ないし小さいバラ選出。

他の四九名は、主に商工業者や法律家。多くは大バラ選出。

- (6) Parry, *op. cit.*, pp.229-30. なお、ノンコンフォーミストの議員は六二名であるが、うち二二名は、二名のユニタリアン、四名のクエーカー、三名のユダヤ人、三名の長老派で、何れもパリ教授のいう急進派ではない。即ち、国教会維持の投票をしたが、教育法の審議で世俗主義の投票をしなかった。
- (7) J. P. Ellens, *Religious Routes to Gladstonian Liberalism*, (1994) p.106; Machin, *op. cit.*, p.248.
 なお、前節注13、14参照。また、六八年選挙ではノンコンフォーミスト議員は自由党内の一四%、七四年選挙で一九%、八〇年選挙で二四%と増える。
- (8) A. W. Young (Helston), *Nonconformists*, 8 Oct. 1873, p.998; Parry, *op. cit.*, p.231; Bebbington, *op. cit.*, p.12.
- (9) A. Illingworth, *Fifty years of politics: Mr. Alfred Illingworth's retrospect: recollections and anecdotes*, (1905) p.53; Parry, *ibid.*
- (10) 第三節で改めて禁酒運動について述べるが、一応 B. Harrison, *Drink and Victorians: the temperance question in England 1815 - 1872*, 1971. と A. E. Dingle, *The campaign for prohibition in Victorian England: the United Kingdom Alliance, 1872 - 1895*, 1980をあげておく。
- (11) Briggs, *Victorian Cities*, p.25.
- (12) 現在、都市社会の世俗化的性格を力説するのはホブスボウムである。Hobsbawm, 'Religion and the rise of socialism', *Marxist Perspectives*, 1, 1978, pp.14, 18. なお A. D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England: Church, Chapel and Social Change 1740 - 1914*, 1976.
 これに対し、一九世紀をば、人口増大、産業革命、政治勢力の動きなどとともに、宗教復興の時代とみようとしたのが K. クラークである。K. Clerk, *Making of Victorian England*, (1976) pp.21, 147f.
- (13) C. G. Brown, 'The Mechanism of Religious growth in urban societies, British cities since the eighteenth century', *European Religion in the age of Great Cities 1830 - 1930*, ed. H. McLeod, (1995) pp.241-2. 産業革命の時期は同時に全国的に福音主義運動が広がった時期でもあることに注意する必要がある。
- (14) McLeod, *Religion and the People of Western Europe, 1789 - 1970* (1981) p.107; *Ibid.*, p.27.

- (15) 拙稿「ウィックの精神構造」(一)、『北大法学論集』第四五巻、一九九四。
- (16) G. I. T. Machin, *Politics and the Churches in Great Britain 1869 to 1921*, (1987) p.4. 六〇年代に儀式主義の側と反儀式主義の側、いずれも組織化を進め、対立した。高教会側は六〇年英国教会連合 The English Church Union を作ったが、これに對し六五年教会協會 Church Association が作られ、對抗した。儀式主義への警戒は宗教會議や議會でも現れた。
- マチン教授によれば、儀式主義の特徴は次のとおりである。①聖餐で東向き^東の位置をとること、②完全な聖餐の服装、③聖餐杯で水をワインに混すること、④聖餐で発酵していないカウエハーのパンを使用すること、⑤礼拝中のお香。Ibid. ; O. Chadwick, *The Victorian Church*, ii (1970) pp.308ff.
- (17) Machin, *ibid.*, p.7.
- (18) Gilbert, *Religion and Society in Industrial England: Church, Chapel and Social Change, 1740 – 1914*, p.90; Bebbington, *op. cit.*, p.2.
- (19) 一八五一年国勢調査。これが宗教についてのやや詳細な唯一の国勢調査である。なお、D. Thompson, 'The making of the English religious classes', *H. J.*, xxii (1979) p. 478.
- (20) Bebbington, *op. cit.*, p.2.
- (21) *Ibid.*, p.20.
- (22) V. A. C. Gatrell, 'Incorporation and the pursuit of Liberal Hegemony in Manchester, 1790-1839', *Municipal Reform and the Industrial City*, (1982) ed. D. Fraser, esp. pp.22.
- (23) Briggs, *Victorian Cities*, pp.131-2.
- (24) Briggs, *ibid.*, p.123.
- (25) Edsall, Richard Cobden, pp.92-3.
- (26) 前掲拙著三四〇―四一―シ参照。
- (27) Briggs, *op. cit.*, p.124-5.
- (28) *Ibid.*, p.204; Hopkins, *Birmingham*, pp.136-40.
- (29) *Ibid.*

- (30) 前掲拙著一九七一九、三三三―四一〇。R. J. Morris, *Class, Sect, and party, The Making of the British Middle Class, Leeds 1820-1850*, 1990.
- (31) Fraser, *Urban Politics in the Victorian England*, (1976) pp.125-6, 147, 266; Briggs, *op. cit.*, 148.
- (32) Briggs, *ibid.*, p.148.
- (33) 上掲拙著一九二、二八九ページ。
- (34) Fraser, *op. cit.*, pp.119-23. マンチェスターを、自治都市にするのにも、コブデンはイニシアテイヴを発揮した。有力な反対派を相手に、「あなた方の町を自治都市にせよ」のスローガンを掲げて戦った(『*Incorporate your Borough*」, 1837)。ただし、マンチェスターではジェントリの介入はなく (Gatrell, *op. cit.*, p.22)、相手はトーリーの旧実業家アリストクラシーであつた。Kidd, 'Introduction', *City, class and culture*, p.5. 第六節でより詳しく述べる。
- (35) A. W. W. Dale, *The Life of R. W. Dale of Birmingham*, (1899) p.250; Fraser, *ibid.*, p.265; Edsall, *op. cit.*, Chap. 5.
- (36) Foster, *class Struggle and the Industrial Revolution: Early Industrial Capitalism in three English towns*, ; A. H. Birch, *Small Town Politics*, 1959; Fraser, *op. cit.*, pp.201-2. ただ、バーナ教授によれば、クロソップは当初国教徒―保守党支持の工場主がつくつた産業的村落であり、やがてデセンター―自由党支持の工場主が入り、双方が対立する典型的な町となった。
- (37) Briggs, *op. cit.*, chap. 6
- (38) Fraser, *op. cit.*, pp.134-42, 225
- (39) K. S. Inglis, 'Patterns of religious worship in 1851', *J. E. H.*, (1960) pp.83-6.
- (40) Bebbington, *op. cit.*
- (41) A. Everitt, *The pattern of Rural Dissent: The Nineteenth Century* (1972), pp.10f, 20-46.
- (42) A. M. Urdank, *Religion and Society in a Cotswold Vale: Nailsworth, Gloucestershire, 1780-1865*, (1990)pp.84-101; C. G. Brown, *op. cit.*, p.246.
- (43) 一九世紀初め二〇〇〇人から二万人ほどの人口の「産業的村落」が生れた。ランカシャーのクロソップなどもそうである。
- (44) ホッバスバウムなども産業的村落の存在を認めるが、彼などは、そうした村落は過去の遺産にすぎず、一過性のものにすぎないという。Hobsbawm, 'Religion and the rise of socialim', *Marxist Perspectives*, 1. (1978) pp.14, 18. これに対し、ブ

タウン教授は「産業的村落」が一九世紀に急膨張する都市の原型になるというのである。

- (45) Brown, op. cit.
- (46) E. J. Evans, *The Contentious Tithe: The Tithe Problem and English Agriculture 1750 - 1850* 1976.
- (47) Brown, op. cit., p.247.
- (48) Ibid., pp.250, 258-9.
- (49) Ibid., pp.249-50.
- (50) E. R. Wicham, *Church and People in an Industrial City*, (1969 ed.) pp.70-81. 北部産業都市の宗派は、近辺の町村での宗派と近似している。H. McLeod, 'Class, community and region: The Religious geography of nineteenth century England', *A Sociological Yearbook of Religion in Britain*, ed. M. Hill, vol. 6, 1973.
- (51) Brown, op. cit., p.251.
- (52) Wicham, op. cit., pp.107-65.
- (53) Foster, *Class Struggle and Industrial Revolution*, 1974; Brown, op. cit., p.252.
- (54) J. Cox, *English Churches in a Secular Society: Lambeth 1870-1930*, 1982; S. Yeo, *Religion and Voluntary Organizations in Crisis*, 1976.
- (55) 教会は移住者リストラレンジャーが最も容易に受け入れられるグループである。なお現代については、拙著『英国社会における伝統と変化』二二六―二七、一五五―一六ページ参照。
- (56) H. McLeod, *Class and Religion in the Late Victorian Cities*, (1974) pp.231-9. なお前掲拙著二二四―二五ページ参照。
- (57) 拙著『英国自由主義体制の形成』一五七―一九ページ参照。
- (58) A. J. Kidd, 'Introduction: The Middle Class in Nineteenth-Century Manchester', *City, class and culture*, p.10. マンチェスターの外、リバプール、バーミンガムのエリートの中で強い。H. McLeod, 'Introduction', *European Religion in the age of Great Cities 1830 - 1930*, ed. H. McLeod, p.25.
- (59) 現在ユニタリアンの研究はかなり盛んとなった。Gatrell, 'Incorporation and the pursuit of Liberal hegemony in Manchester 1790-1839', Fraser, D., *Municipal Reform and Industrial City*, (1982); Seed, J., 'Unitarianism, Political economy and the

- antinomies of liberal culture in Manchester, 1830-50', *Social History*, VII (1982); Kidd, *ibid.*, p.22.
- (60) R. Brown, *Church and State in Modern Britain 1700 - 1850*, (1991) pp.448-9.
- (61) Robbins, *John Bright*, p.24. 118.
- (62) R. Brown, *op. cit.*, p.449.
- (63) W. R. Ward, *Early Victorian Methodism: The Correspondence of Jabez Bunting, 1830 - 1858*, (1976) p.192.
- (64) Methodist New Connexion, United Methodist Free Churches, Bible Christians の三派。
- (65) R. Brown, *op. cit.*, p.110.
- (66) *Ibid.*, pp.446-7.
- (67) *Ibid.*, pp.447-8.
- (68) General or Arminian Baptist, Particular Baptist, Strict and particular Baptist. 最初のもはアルミニウス派的、第二のものは穏健なカルヴァン派、最後のもは厳格なカルヴァン派である。 *Ibid.*, p.448.
- (69) *Ibid.*, p.448.
- (70) まだノンコンフォーミストの牧師で大学に関係ある者は少ない。一八七〇年正式の教育のない牧師は——洗礼派の場合——半分もいた(一九〇一年には一七%と減るが)。大学に関係をもつ者は一九〇一年になっても、洗礼派で八%、組合教会派で一六%にしかなっていない。J. E. B. Munsen, 'The Education of Baptist Ministers, 1870-1900', *Baptist Quarterly*, vol. 26 1976, p.321.
- (71) ロントンのイースト・エンドのベスナル・グリーン (最も貧困な地区の一つ) では、六・八%しかノンコンフォーミストの教会にゆかない (何れかの教会に行く者も一三・三%にすぎない)。McLeod, *op. cit.*, pp.300, 303.
- (72) Yeo, *op. cit.*, pp.119-24; Bebbington, *op. cit.*, p.5.
- (73) *Christian Witness 1848*, pp.294-5, 572; Fraser, *Urban Politics in Victorian England*, (1976) p.14.
- (74) Circular letter, Lancashire and Cheshier association of Baptist Churches 1850, p.8; Fraser, *ibid.*
- (75) Thomas, *op. cit.*, p.207.
- (76) Bebbington, *op. cit.*, pp.4-5.

- (77) J. C. G. Binfield, 'Congregationalism's Two Sides of the Baptistery: A Paedobaptist View', *Baptist Quarterly*, V. I. 26. 1975 pp.119-33; Bebbington, *ibid.*
- (78) ユニテリアンは一八一三年まで非合法的な宗派であった。R. Brown, *Church and State in Modern Britain 1700 - 1850*, p.445.
- (79) 前巻〇〇ページ。
- (80) Kidd, 'Introduction: The Middle Class in Nineteen-Century Manchester', p.10. マンチエスターでもユニテリアンは人教的にはごく一部にすぎないが、五一年の国勢調査によれば、教会に行く者三万二二五五人のうち、彼らは一六七〇人を占めるにすぎない。にも拘らず彼らは人数でみるよりは地方でも全国的にも知的生活ではるかに大きな役割を演じていた。
- (81) A. Thackray, 'Natural Knowledge in the cultural context: Manchester Model', *A. H. R.*, LXIX (1974); I. Inkster, 'Introduction', *Metropolis and Province: Science in British Culture 1780 - 1850*, (1983), ed. Inkster and J. Morrel; Kidd, *ibid.*, p.22.
ユニテリアンであるB・ヘイウッドはマンチエスターの指導的な地方銀行家であり、文学・哲学協会の中心人物であり、技師協会の会長(一四一四一年)であり、地区プロヴィデント会の会計(六八年の死去まで)であり、王立マンチエスター協会及び統計協会の創立者であった。
- (82) ランカシャー、ヨークシャー、ウエストモアランドに多い。R. Brown, *op. cit.*, p.448
- (83) *Ibid.*
- (84) McLeod, *Class and Religion*, P.312.
- (85) A. J. Gardner, *Life of George Cadbury*, (1923) p.195; K. S. Inglis, *Churches and the Working Classes in Victorian England*, (1963) p.13.
- (86) M. L. Edwards, *After Wesley*, (1935) p.145.
- (87) Inglis, *op. cit.*, p.9.
- (88) *Ibid.*, p.12.
- (89) J. Petty, *The History of the Primitive Methodist connexion*, (1860)p. 386; Inglis, *ibid.*, p.12.
- (90) G. D. H. Cole, *A Study of Cooperation*, (1944) p.55.

- (91) R. Brown, *op. cit.*, p.447
- (92) *Ibid.*
- (93) *Congregational Year Book*, (1853) p.85.
- (94) R. Halley, *Lancashire, its Puritanism and Nonconformity*, (1968) II, p.497.
- (95) J. Parker, *A Preacher's Life*, (1899) p.143;
- (96) Inglis, *op. cit.*, pp.100-1.
- (97) R. Brown, *op. cit.*, pp. 447-8.
- (98) Booth, *Life and Labour of the People in London: Third Series: Religious Influence*, vol.7 (1902)p.123.
- (99) Whitley, *A History of the British Baptists* (2nd ed. 1932), p.171.
- (100) *Congregational Year Book*, (1848) pp.83-95.
- (101) Quoted in A. C. Whitby, 'Matthew Arnold and the nonconformists', p.88; Inglis, *op. cit.*, p.15.
- (102) *Congregational Year Book*, (1853), p.83; Inglis, *ibid.*, p.102.
- (103) *Congregational Year Book*, (1873), p.86; Inglis, *ibid.*
- (104) *Congregational Year Book*, (1870), p.66; Inglis, *ibid.*, p.104.
- (105) A. W. W. Dale, *The Life of R. W. Dale*, p.613; Inglis, *ibid.*, pp.104-5. バーミンガムについては Hopkins, *op. cit.* pp.139-40.
- (106) *Ibid.*
- (107) Bebbington, *op. cit.*, pp.53-5. 八九年のドックストライキを調停したのは、カトリックの司教マニングであった。
- (108) J. Bossy, *The English Catholic Community 1570 - 1850*, 1975; E. R. Norman, *Roman Catholicism in England*, 1986; R. Brown, *op. cit.*, pp.462-8. p.126.
- (109) R. Brown, *ibid.*, p.463.
- (110) Bebbington, *op. cit.*, p.4.
- なお、一九世紀の都市で中産階級がどの宗派に属したかについては以下参照。E. P. Henneck, *Fit and Proper Persons*, 1973; L. Davidoff and C. Hall, *Family Fortunes*, 1987; T. Koditschek, *Class Formation in Urban-Industrial Society: Bradford*

1750 - 1850, 1990.

労働階級については、Wickan, *Church and People in an Industrial City*, 1957; Inglis, *op. cit.*

しかし、ウイックカムの研究は、シエファイールドの研究に基づくものであるし、イングリスの研究は、主に中産階級や牧師の側からの《証言》に基づくものであって、労働階級の宗教の研究ははなはだ不完全である。今後、労働階級に内在し、その独自の《信心》を明かにしてゆく必要がある。本論文は、政治のレベルでの宗教を扱うのであるから——当時は政治的に中産階級が労働階級に優位しており——この点一応避けて通れるであろう。

教会員の統計的研究については、P. T. Phillips, *The Sectarian Spirit*, 1982.

スコットランドについては、A. A. MacLaren, *Religious and Social Class: The Disruption Years in Aberdeen*, 1974; C. Brown, *Social History of Religion in Scotland since 1730*, 1987.

- (III) C. B. Macpherson, *The Political Theory of Possessive Individualism*, 1962; A. Arblaster, *The Rise and Decline of Western Liberalism*, 1984; J. Gray, *Liberalism*, 1986.
- (II2) S. Collini, 'The Idea of "Character" in Victorian Political Thought', *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th series, 35 (1985) pp.29-50; R. Bellamy, *Liberalism and Modern State*, (1992) p.10.
- (II3) S. Smiles, *Self-Help*, 1859; *Character*, 1871; *Thrift*, 1875; *Duty*, 1880. なお、拙稿「一九世紀ウイックの精神構造」(一) 一〇ページ参照。
- (II4) Vincent, *The Formation of the Liberal party*, p.77.
- (II5) *Ibid.*, pp.76-82, chap.3.
- (II6) ブリックス同、一六—一四ページ。
- (II7) ただし、労働党の形成とノンコンラフター・スラムとの関係については意見が分れている。A. Ainsworth, 'Religion in the working class community, and the evolution of socialism in late Victorian Lancashire: A case of working class consciousness', *Historie sociale*, 10, 1977, pp.354-80; McLeod, *op. cit.*, p.35.